

第2章. 平戸市の概要

2-1. 平戸市の位置および概要

平戸市は、九州の西、長崎県の北西端に位置し、^{ひらどしま}平戸島・^{いきつきしま}生月島・^{あづちおおしま}的山大島・^{たくしま}度島・^{たかしま}高島の有人島及び九州本土北西部に位置する^{たひら}田平と周辺の多数の島々で構成されている。(図6・7)

平戸島は、田平と平戸大橋により、生月島は、平戸島と生月大橋で結ばれている。的山大島・度島・高島は離島であり、交通手段は船舶のみである。

平戸市主要統計指標（平戸市 2015）によると、面積は235.08km²で、山は^{やすまんだけ}安満岳の514.2m（平戸紀要第3号では536mとなっていることから、以降、安満岳の標高は536mを使用する。）が最も高く、河川は総じて短小であり、坂瀬川の6.26kmが最長である。平坦地は少なく、起伏の多い地形で、海岸線は各所に岬が突出し、特に西海岸では海蝕崖が発達している。それら平戸島・生月島の西海岸を中心に、本市の約20%が西海国立公園に指定されている。

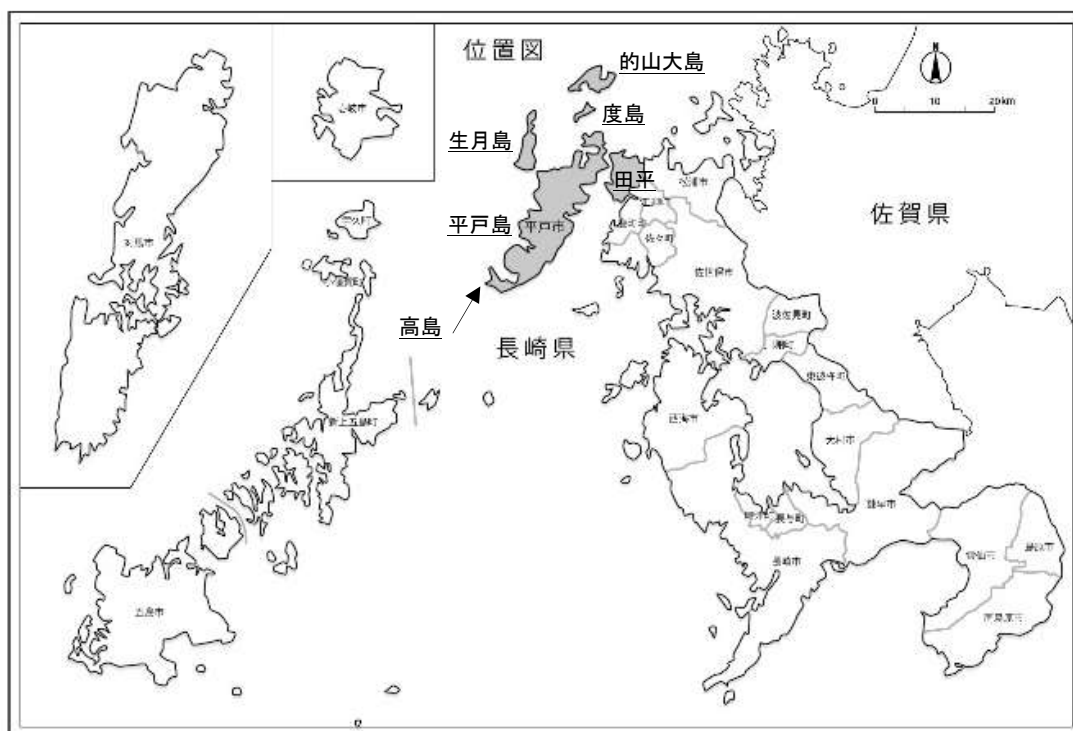
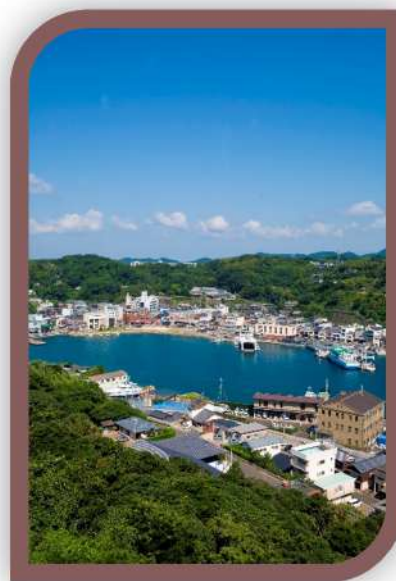


図6 平戸市の位置図（平戸市の拡大図は、図7を参照）

また、入り組んだ海岸線を持っているため、湾が多く、地方港湾は平戸港をはじめ 6 港、56 条港湾が紐差港をはじめ 7 港、漁港は大小 33 港にも及んでおり、日本有数の漁港数を有している。(図 7)

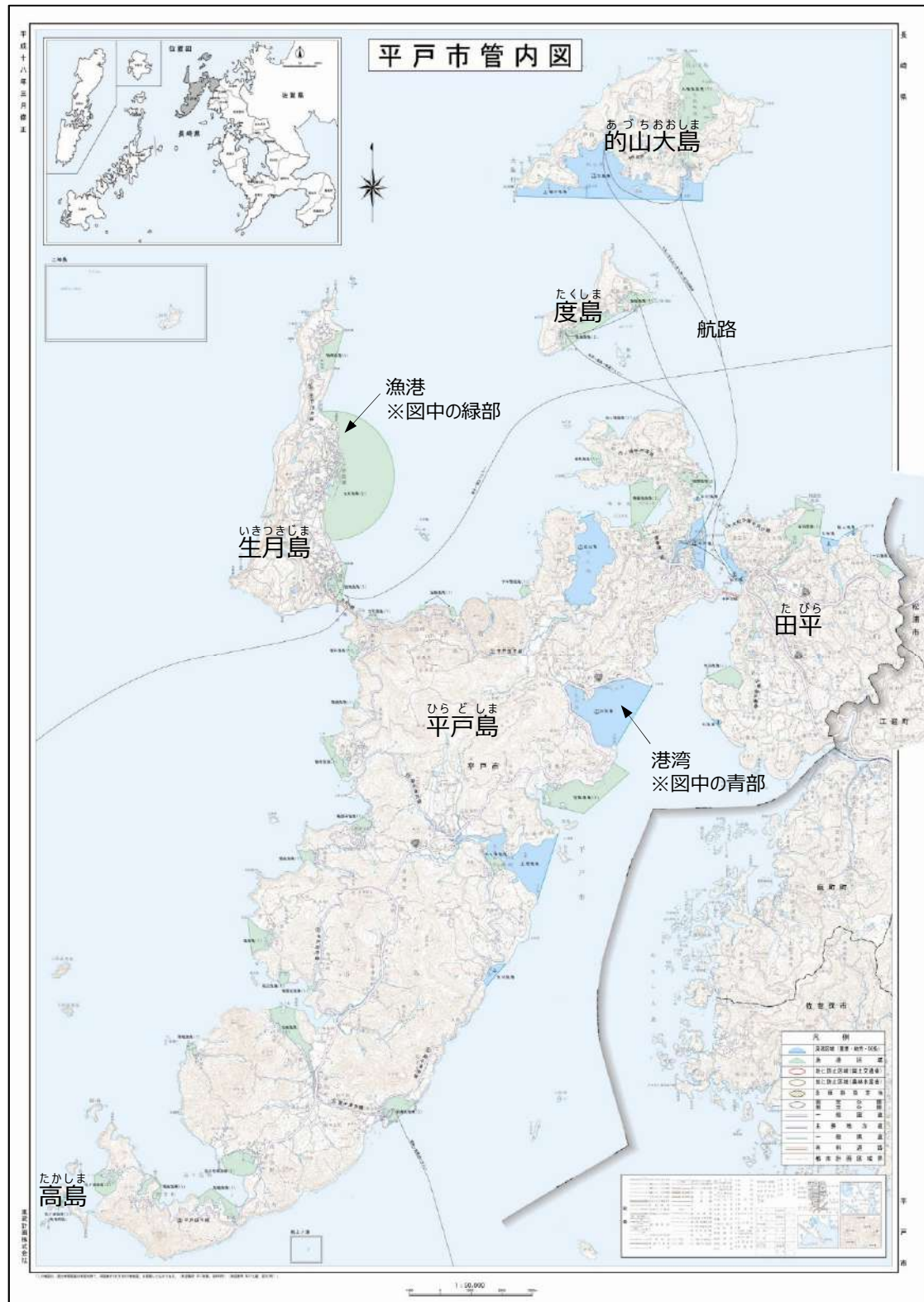


図 7 平戸市の港湾および漁港分布図

物流（人や物資、情報など）の経路や方法は、地形的要因に大きく規定される。⁷島嶼^{とうしょ}という条件の中、平戸は中世には倭寇の拠点になり、近世にかけては国際貿易港として、海を媒介とした側面が目立つ地域である。

陸の交通を見ると、平戸に初めて自動車が来たのは大正 8 年（1919）であるが、車が交通の手段として暮らしの中に定着する昭和 10 年代（1935～）までは、徒歩での移動が通常で、1～2 時間歩くことも珍しくなかった。平戸島の中でも比較的県道の整備が遅かった平戸島西海岸北部にある春日町住民の話によれば、平戸・志々伎間を縦断する幹線道（旧下方街道^{しもかた}（図 8・9））まで行くのに徒歩で 2 時間ほどかったという。

平戸島西海岸地域の集落は、漁業で栄えた生月島の経済圏の中にあり、船が重要な移動・運搬手段であった。大正 12 年（1923）の管内図（図 8）を見ると、春日集落周辺の道は、道幅 1m 未満であることが確認でき、これは平戸島を縦断する幹線沿いを除けば他の集落でも同様である。分かれ道や街道との接続地点には石柱（写真 9）があり、行先と方向が記されていた。



図 8 大正 12 年（1923）管内図 平戸市春日町周辺の拡大（陸地測量部参謀本部 1923）

・破線は、道幅 1m 未満のもの。安満岳北西部の道は、全て 1m 未満であったことが分かる。

⁷ 大小の島々のこと。

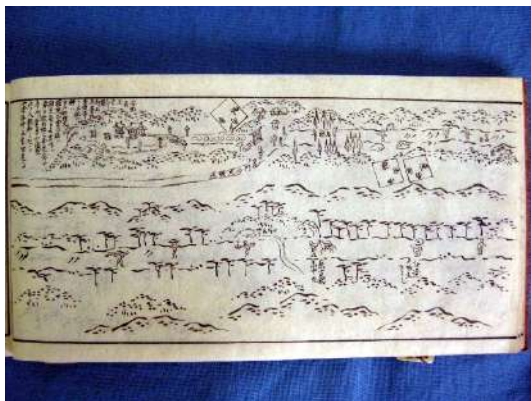


図 9 下方街道図絵 (1806-1841)



写真 9 街道沿いの石柱

海の交通を見ると、平戸の中でも、城下町であった平戸港、平戸島北部の田助港^{たすけ}、南部の前津吉港^{まえつよし}は海上交通の要衝であった。近代にはここから島の内外へ定期航路を設けていた（図 10）。江戸時代¹の海禁政策により、国際貿易港としての地位は失う（2 - 4）が、国内・地方航路においては、拠点となる港であった。

田助港（写真 10）は、江戸時代より北前船の出入りで賑わった港である。田助は風待ちの港で、船がここで商いをする²ことはなかったが、海沿いには年間を通して寄港する船を待ち受ける宿が並んでいた。港は水深があるため、船は宿の庭先まで寄せ、アユミ（大きな板）を渡して直接出入りをしたため、宿は庭を海に向けて広くとり、石造りの階段がそのまま海に伸びている。宿は主人の出身地を屋号にしたところが多く、肥後屋、薩摩屋のほか、瀬戸内とのつながりをうかがわせる神戸屋、明石屋、播磨屋、松島屋、広島屋、讃岐屋といった名が並んだ（写真 11）。船が港に入ると後背地の農村からはその船を目当てに薪や炭を売りに来ていた。（平戸港については後述。）



写真 10 田助港



写真 11 田助港（昭和初期）

・帆船時代より昭和初期まで、風待ち・潮待ちの港として栄えた田助港。船宿、遊郭が建ち並び、賑やかな港であった。明治時代には、長崎より田助を経て壱岐・対馬・朝鮮への航路も開かれていた。

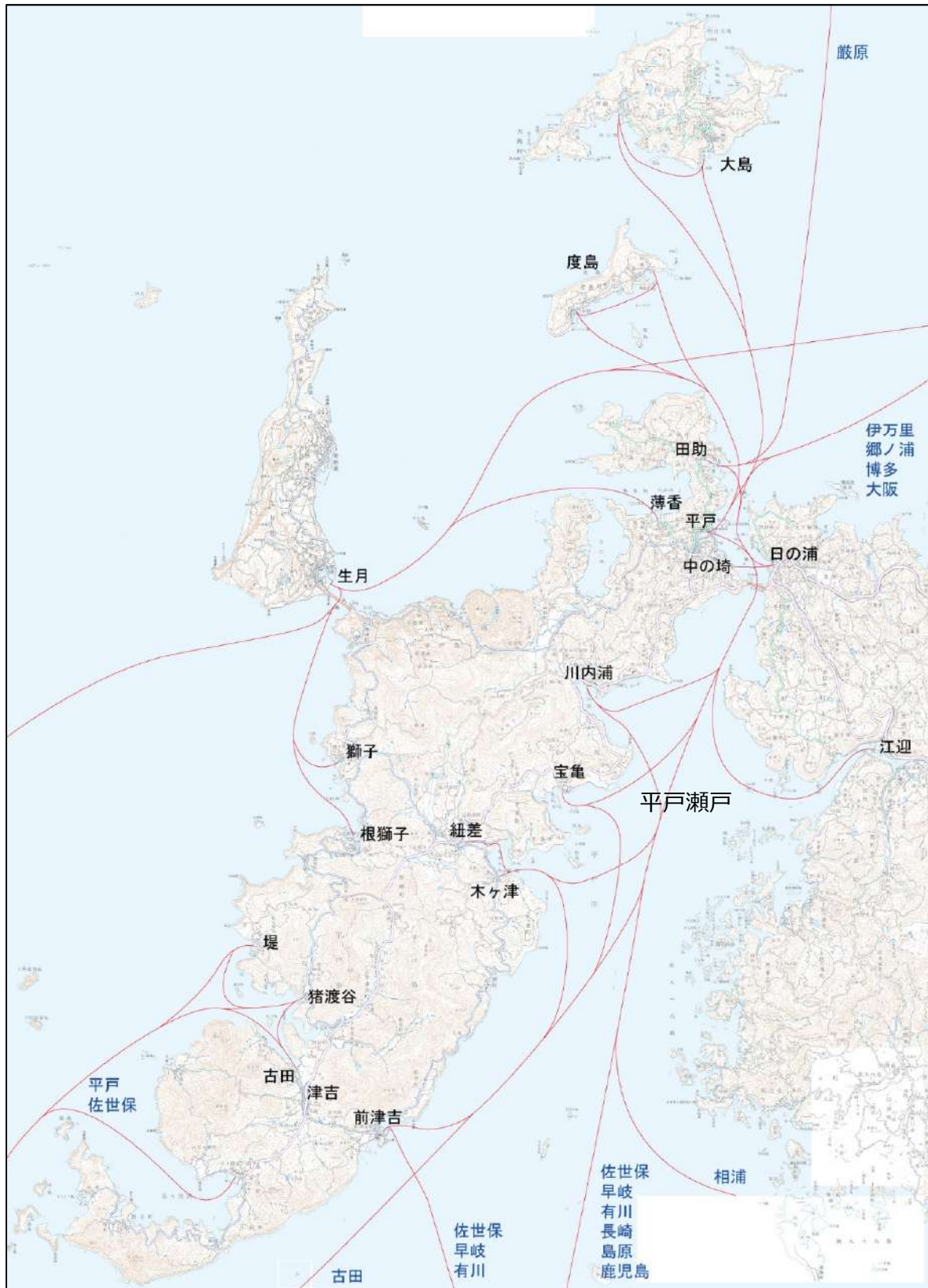


図 10 近代の定期航路

大正 7 年（1918）の航路（表 5）を図示したものである。平戸瀬戸を中心に、市内だけでなく、外とつながっていたことが分かる。動力船の導入により、新たな航路の開発もあったと思われるが、航路が主な交通の手段であった平戸においては、古くより確立されていたものと考えられる。

表 5 大正 7 年 (1918) の航路 (町村郷土史から抜粋)

港名	行先	発着	備考
度島	平戸	1 日 1 便	発動機船
田助	長崎	毎月 26 日までの偶数日及び月末	汽船、直行 6 時間
	郷ノ浦	毎月 27 日までの奇数日	汽船、直行
	博多	毎月 1,7,9,15,17,23,25 日	汽船、郷ノ浦-厳原-勝本経由
	厳原	毎月 3,5,11,13,19,21,27 日	汽船、郷ノ浦-博多-勝本経由
	鹿児島・島原・博多・大阪等	隔日 (不定期)	大阪商船、深川汽船、尼ヶ崎船
平戸	佐世保	1 日 2 便	汽船、田平-江迎-歌ヶ浦-楠泊-佐々-相浦経由
	江迎・相浦	1 日 1 便	汽船、江迎発-平戸-田平-江迎-歌ヶ浦-矢岳-楠泊-相浦
	早岐・有川	隔日	汽船、早岐発-佐世保-津吉-木ヶ津-平戸-生月-山田-宇久-平-神浦-前方-笛吹-小串-榎津-有川
	長崎	1 日 1 便	汽船、佐世保-面高-蠣の浦-松島-瀬戸-神の浦- (西彼杵軽油)
	大島・伊万里	1 日 2 便	汽船、大島発-平戸-星鹿-御厨-志佐-江口-今福-福島-楠久-伊万里
	大島・津吉	1 日 2 便	大島-平戸-宝亀-木ヶ津-紐差-津吉
	大島	1 日 1 便	度島
薄香	生月	1 日 3 便	
中の埼	日の浦 (田平)	随時	
川内浦	平戸	不定期	渡海船
	相ノ浦方面		発動機船
紐差			
堤・猪渡谷	古田・平戸	不定期	古田へは朝夕
宝亀	古田・平戸	不定期	
木ヶ津	古田・平戸	不定期	
獅子・根獅子	生月・平戸		農・水産物の運搬
前津吉	早岐・有川		九州汽船
	大島		発動機船
	紐差・佐世保		発動機船
	佐世保		発動機船、相浦寄港
古田			和船による貨物輸送
志々伎	佐世保	隔日	個人による貨物輸送、宇久 (薪)、相浦 (魚)、佐世保 (海産物・穀類・薪)、長崎 (海産物・生魚)、博多 (生魚)

2-2. 社会的環境

2-2-1. 沿革

平戸市の歴史は古く、約9万年前の日本最古級といわれる中期旧石器類が発見された入口遺跡や長崎県本土では数少ない大和政権とのつながりを示す前方後円墳が2基残っているなど、古い時代から人々の営みがあったことがうかがえる。また、古代から海外に向け開かれた古都であり、飛鳥時代から遣隋使、遣唐使の寄港地として知られ、大航海時代にはアジアやヨーロッパなど大陸交流の玄関口として栄え、16世紀にはポルトガル船が来航し、17世紀前半には、オランダやイギリスの商館が設置されるなど、南蛮文化やキリスト教伝来の地として繁栄を極めた。



図 11 行政区の変遷図

江戸時代後期には、益富組、井元氏鯨組など西海捕鯨の中心地として栄え、特に益富組は日本一の規模を誇った。

明治4年（1871）の廃藩置県後、平戸の各地区は市制、町村制施行などによりそれぞれ変遷を重ね、平成17年（2005）10月1日に現在の平戸市となった。（図11）

2-2-2. 人口構造、産業構造

平戸市の総人口は、31,920人（平成27年（2015）国勢調査）で、長崎県内21市町中10位となっており、前回の平成22年（2010）国勢調査に比べ、人口で2,985人（8.6%）の減、世帯数で464世帯（3.6%）の減となった。

平戸市人口ビジョン（平戸市2016）の「総人口の推移と予測（図12、表6）」によれば、昭和55年（1980）の50,849人と比較すると、平成27年（2015）時点で18,929人（37.2%）の減となっている。国立社会保障・人口問題研究所の人口推計方法を用いると、平戸市の総人口は、2040年には20,000人を割り込み、2060年には11,457人まで減少すると推計されており、今後も慢性的な人口減少が続くと考えられる。

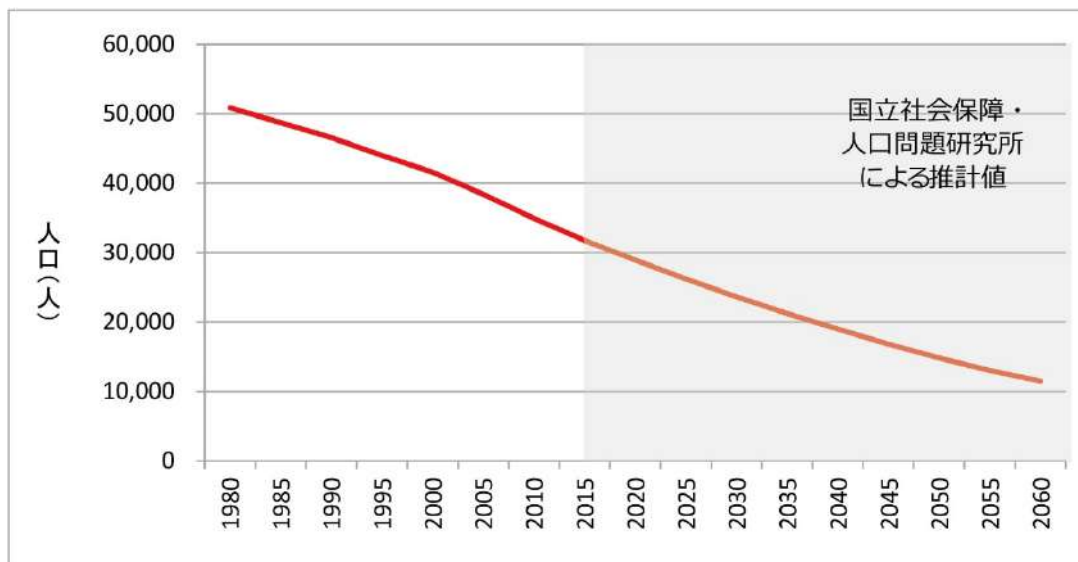


図 12 平戸市総人口の推移と予測（資料：平戸市人口ビジョン）

表 6 平戸市総人口の推移と予測

	1980 年	1985 年	1990 年	1995 年	2000 年	2005 年	2010 年
総人口（人）	50,849	48,719	46,572	43,966	41,586	38,389	34,905
	2015 年	2020 年	2025 年	2030 年	2040 年	2050 年	2060 年
総人口（人）	31,724	28,915	26,192	23,611	18,959	14,794	11,457

※「国勢調査」「将来推計用ワークシート」より作成

「年齢 3 区分別人口の推移と予測」（図 13、表 7）をみると、昭和 55 年（1980）以降、年少人口（0 歳～14 歳）と生産年齢人口（15 歳～64 歳）はともに減少しているのに比べ、老年人口（65 歳以上）は増加している。老年人口割合は、昭和 35 年（1960）に高齢化社会といわれる 7%を超え、昭和 60 年（1985）に高齢社会とされる 14%を超えた。また、平成 7 年（1995）には初めて老年人口が年少人口を上回り、平成 17 年（2005）では老年人口割合は 29.8%となり、全国平均と比較すると 9.7 ポイント高くなっている。しかし、高齢人口も近年は増加傾向が弱まり、2025 年をピークに減少に転じていくと予測されていることから、3 区分全ての人口が減少していくことになる。

図表は添付していない（詳細は平戸市人口ビジョンを参照）が、これに伴い、子どもを産み育てる世代の減少を背景に毎年 300 人の自然減（出生数が死亡数を下回る）の状態となっているほか、近年の人口移動をみると、男女とも進学や就職する年代の転出超過が目立っていることが分かる。

世帯数は、人口と比較すると若干の増減はあるもののほぼ横ばいの状態で推移している。また、1 世帯当たりの平均世帯人員は、昭和 30 年（1955）の 5.4 人に対し、平成 17 年（2005）は約半分の 2.8 人となり、核家族化が進行していると考えられる。

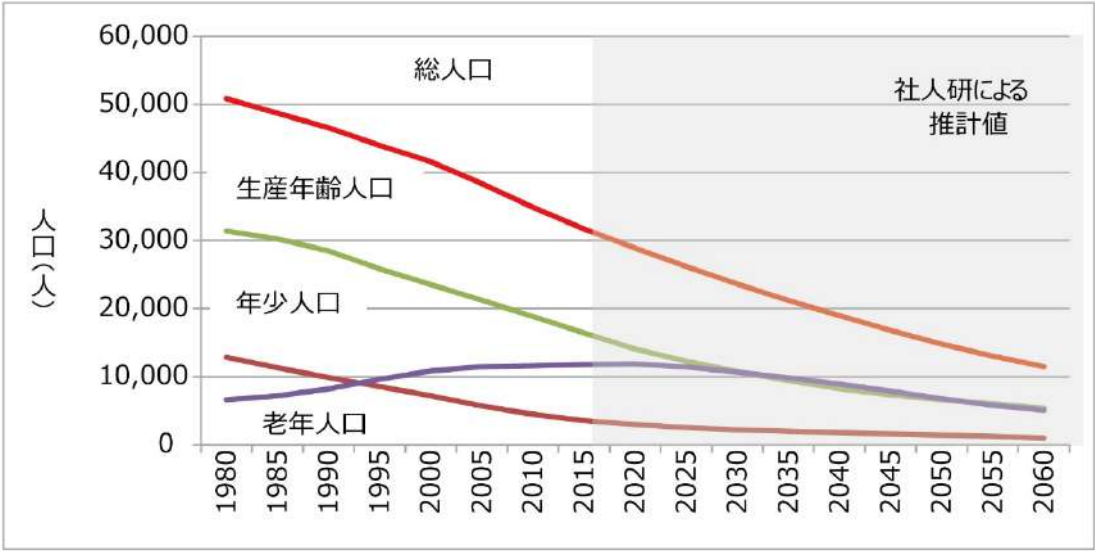


図 13 年齢 3 区分別人口の推移と予測（資料：平戸市人口ビジョン）

表 7 年齢 3 区分別人口の推移と予測

	1980 年	1985 年	1990 年	1995 年	2000 年	2005 年	2010 年
総人口（人）	50,849	48,719	46,572	43,966	41,586	38,389	34,905
年少人口	12,849	11,315	9,872	8,520	7,195	5,709	4,477
生産年齢人口	31,407	30,222	28,482	25,827	23,534	21,225	18,848
老齢人口	6,593	7,182	8,218	9,619	10,857	11,455	11,580
	2015 年	2020 年	2025 年	2030 年	2040 年	2050 年	2060 年
総人口（人）	31,724	28,915	26,192	23,611	18,959	14,794	11,457
年少人口	3,562	2,987	2,508	2,160	1,777	1,403	1,019
生産年齢人口	16,395	14,085	12,262	10,754	8,255	6,594	5,358
老齢人口	11,766	11,843	11,421	10,697	8,927	6,798	5,080

※「国勢調査」「将来推計用ワークシート」より作成

※年少人口（15 歳未満）、生産年齢人口（15 歳以上～65 歳未満）、老齢人口（65 歳以上）

就業者総数は、人口減少とあいまって年々減少している。昭和 30 年（1955）には 32,703 人であったが、昭和 50 年（1975）には 23,123 人、平成 17 年（2005）には 17,721 人となり、昭和 30 年（1955）と比較すると 45.8%の減少率となっている。

産業人口の推移（図 14、表 8）をみると、昭和 50 年（1975）と平成 22 年（2010）を比較して、約 60%減となっている。特に第 1 次産業人口は約 30%減と減少幅が大きくなっている。

産業別人口（大分類）では、医療・福祉が最も多く、次いで卸売業・小売業、農業・林業、建設業、漁業の順となっている。

国と就業者比率を比較した特化係数（A 産業の特化係数＝平戸市の A 産業の就業者比率／全国の A 産業の就業者比率）は、漁業が男性 35.7、女性 15.2 と高く、農業は男性

3.2、女性 3.1、複合サービス（郵便局や農林水産業協同組合など）は男性 5.0、女性 2.5 となっており、これらが平戸市の主要産業になっていることが分かる。

「潜伏キリシタン関連遺産」の構成資産になっている春日町は、22 世帯 67 人（平戸市人口統計平成 31 年（2019）.2.1 現在）が生活を営んでおり、住民ヒアリングによると多くは兼業農家であり、数世帯が専業で農業と漁業を営んでいる。人口に対して中学生以下が占める割合が高いことから、現時点での高齢化率は高くはないが、49 歳以下の人数が少ないことから、今後進学などに伴って高齢化が急速に進むと推測される。世界遺産登録に伴う交流人口の増加を、地域の経済活動を取り込んだ形で持続させる仕組みをつくることが急務である。

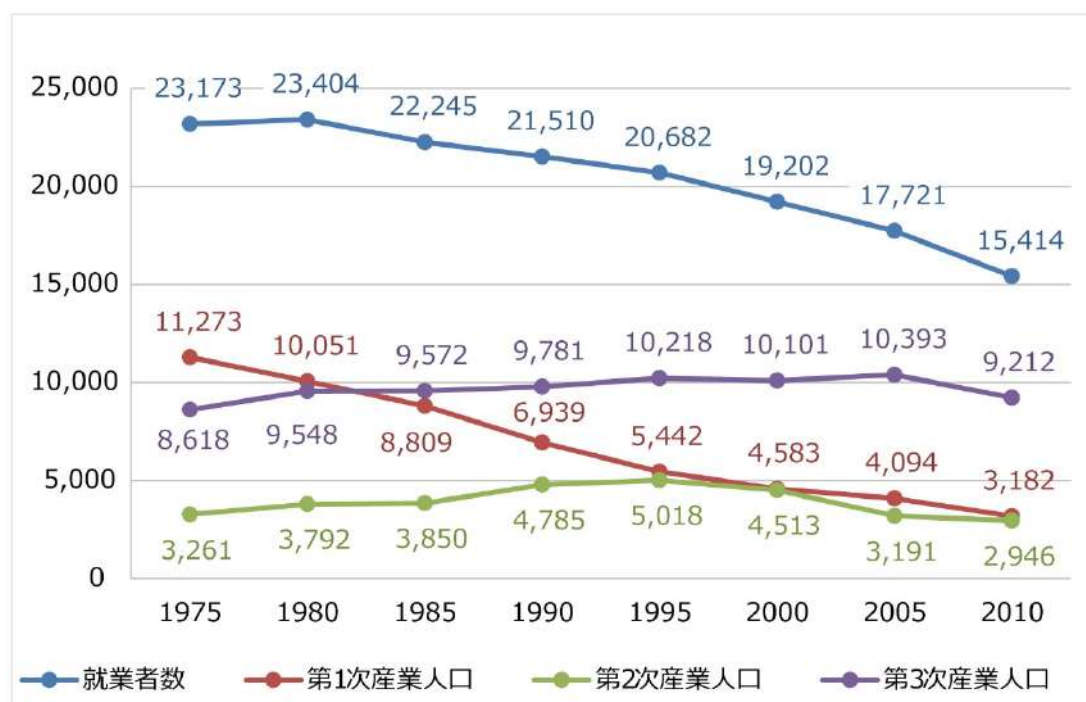


図 14 産業人口の推移（資料：平戸市人口ビジョン）

表 8 産業人口の推移

	1975 年	1980 年	1985 年	1990 年	1995 年	2000 年	2005 年	2010 年
就業者数	23,173	23,404	22,245	21,510	20,682	19,202	17,721	15,414
第 1 次	11,273	10,051	8,809	6,939	5,442	4,583	4,094	3,182
第 2 次	3,261	3,792	3,850	4,785	5,018	4,513	3,191	2,946
第 3 次	8,618	9,548	9,572	9,781	10,218	10,101	10,393	9,212

※「国勢調査」より作成

※就業者数には、分類不明の産業人口を含むため、就業者数と各産業人口の合計は一致しない。

※第 1 次産業（農業、漁業、林業）、第 2 次産業（鉱業、採石業、砂利採取業、建設業、製造業）、第 3 次産業（第 1 次産業・第 2 次産業以外の産業）

2-3. 観光の状況

平成 29 年（2017）平戸市観光統計（平戸市 2018）によれば、平戸市を訪れる観光客の概要は以下のとおりとなっている。

- ・平戸市における観光客数は約 175 万人（表 9）であり、その多くが平戸地区を訪れている。特に平戸港を中心とした城下町地区は、観光施設や宿泊施設などが集中しており、また、各地域への結節点となっていることから、平戸観光における拠点となっている。
- ・年間観光客数の多くを日帰り観光客が占めている（表 10）ことから、その目的は近隣地からのドライブ中心の観光スタイル、または通過型観光の場になっていることが推測される。
- ・宿泊者の多くは、九州北部（福岡・佐賀 約 35.1%）や長崎県内（約 18.1%）ほか九州各県で約半数を占めているが、関東（約 11.6%）、近畿（約 9.7%）など都市圏も目立つ。
- ・平成 29 年（2017）日帰り観光客数が増加した要因として、熊本地震や西九州自動車道の延伸などにより、福岡や佐賀からの入り込み客数が増えたと考えられる。
- ・宿泊客数については、大型宿泊施設のリニューアル工事に伴う休館があったものの、オープン後に宿泊客数が大きく伸びたことや、大手進学塾の勉強合宿を誘致できたことなどから増加している。
- ・修学旅行は、前年より 18 校増加し 84 校であった。
- ・一方、前年に過去最高の 16,292 人だった外国人観光客数は、15,043 人と減少した。要因としては中国や台湾の団体ツアーの減少などが考えられる。
- ・観光施設来場者数は、245,439 人（対前年比△0.2%）であった。世界遺産の関連遺産である田平天主堂も 69,520 人と年々増え続けている。

その他、「JTB 地域パワーインデックス 2017」によれば、来訪者が平戸に抱くイメージとして「自然」、「魅力的な建築物や街並み」、「料理がおいしい」などといったイメージがあり、同項目は来訪者満足度も高いことから、これらを維持するとともに、来訪者満足度が低い「宿泊施設」や「温泉」、「地元とのふれあい」については改善を図る重点項目であるといえる。



写真 12 田平天主堂を訪れる観光客と教会守
※教会守とは、来訪者マネジメントを行う管理人



写真 13 自然・景観は満足度が高い

表 9 平成 29 年（2017）観光客の動向

内 容	人 数	増 減（前年比）
観光客数	1,754,972 人	2.8% 約 48 千人の増
宿泊客数	231,493 人	9.3% 約 20 千人の増
宿泊客延べ滞在数	347,241 人	9.3% 約 29 千人の増
日帰り客数	1,407,731 人	1.3% 約 18 千人の増
観光消費額	98 億 7 千 9 百万円	3.3% 約 3 億 1 千 6 百万円の増
観光施設入館者数	245,439 人	△0.2% 約 4 百人の減
修学旅行客数	84 校 10,950 人	39.5% 18 校 3,099 人の増

表 10 地区別観光客数

	平戸地区	生月地区	田平地区	大島地区	合 計
観光客数	1,273,893 人 (3.2%)	214,085 人 (5.3%)	254,954 人 (△0.9%)	12,040 人 (1.6%)	1,754,972 人 (2.8%)
日帰り客数	1,012,813 人 (1.4%)	207,750 人 (4.9%)	181,898 人 (△2.1%)	5,270 人 (△26.1%)	1,407,731 人 (1.3%)
観光消費額	7,530 百万円 (4.6%)	546 百万円 (4.7%)	1,677 百万円 (△3.4%)	126 百万円 (14.9%)	9,879 百万円 (3.3%)

ここ数年間の観光統計や民間事業者が実施するアンケートなどの結果から、観光客が平戸観光に期待するものは、「歴史や文化（文化財）、自然景観、食」であることが分かっている。平戸市はこれまで「歴史」、「祈り」、「恵み」をテーマに歴史や文化（文化財）を中心に観光施策を推進してきているが、大型バスで乗り付ける団体観光型からマイカーで巡る個人観光型へ推移しつつある現状の中で、今後は市内に分布する魅力的な地域資源キーワードに文化観光を推進し、滞在時間を延ばすとともに、地域間連携を強化しながら互いに相乗効果の見込める施策を図っていく必要がある。

【参考文献】

- 1) 平戸市（2016）『観光統計 平成 27 年（1 月～12 月）』
- 2) 平戸市（2016）『平戸市人口ビジョン』
- 3) 平戸市史編さん委員会（1995）『平戸市史 考古編』
- 4) 平戸市史編さん委員会（2005）『平戸市史 通史編』



2-4. 歴史的環境

『南路（大洋路）の歴史と文化』

～航路（港）を中心に発展してきた「港市平戸」～

年代	日本の時代区分	航路（港）を通して平戸に伝えられた海外文化の影響
BC.10000	縄文時代	・漁ろう民による朝鮮半島との交流 【つぐめの鼻遺跡：朝鮮半島系土器】
BC.5000		・畑作の開始
0	弥生時代	中国大陸・朝鮮半島からの影響 ・稲作農耕の開始（金属器の導入） 【里田原遺跡：水田遺構、木器】 【千里ヶ浜遺跡：朝鮮半島系土器】
		・貝の道（南方諸島との交流） 【根獅子遺跡：貝輪】 【馬込遺跡：松菊里型住居】
500	古墳時代	・古墳の造営 【岳崎古墳など】
	古代	・仏教伝来 ・僧栄西、宋から帰国し平戸（葦浦）に上陸する。 【富春庵跡：茶】
1000	中世 （鎌倉・室町・戦国）	・中世城郭の造営 ・海人から信仰された霊山に寺院が建立される 【箕坪城などの山城】
		・松浦党による中国、朝鮮との私貿易 【大陸で作成された薩摩塔や宋風狛犬の設置】
1500	近世 （安土桃山・江戸）	ヨーロッパ（ポルトガル、オランダ、イギリス）からの影響 ・キリスト教の布教 【教会堂、十字架の設置、キリシタン墓地】
		・近世城郭の造営 【平戸城】
1600		・ウィリアム・アダムス、琉球の甘藷を平戸に持ち帰りコックスが栽培 【コックスの甘藷畑跡】
		・鄭成功、平戸を出航し明の福建に行く 【鄭成功関連史跡】
		・オランダやイギリスとの貿易 【平戸オランダ商館、イギリス商館】 【幸橋：オランダ橋】
1700		・キリスト教に対する禁教政策 【聖地信仰、潜伏キリシタン信仰】
		西洋（フランスなど）からの影響
1800	近・現代	・近代化の促進
1900		・パリ外国宣教会による布教 【教会堂】

図 15 航路（港）を中心に発展してきた平戸の歴史

2-4-1. 港市平戸

氷河期の旧石器時代の遺跡は平戸周辺地方に多く分布しており、石器の特徴から一部の集団が朝鮮半島から移住してきたと考えられる。縄文時代は定住化が顕著になるほか、海への働きかけが強まる中で漁ろう活動が盛んになっており、土器や石器の特徴から朝鮮半島との交流が確認されている。

弥生時代になると、水田稲作が大陸からもたらされ、里田原遺跡では水田遺構とともに農耕に関する多くの木器が発掘されている。平戸島西海岸にある根獅子遺跡では、南海産ゴホウラ製貝輪が出土していることから、沖縄・奄美地方との交流があったようである。

古墳文化の痕跡として、田平に2基の前方後円墳と、生月島や的山大島、度島、平戸島北部に小規模な円墳が検出されている。高塚式古墳の造営は大和政権との関係が窺え、生月島の小円墳は海上交通や漁ろう活動を生業とする集団の首長墓と考えられる。

7世紀以降、大和朝廷は中国の王朝との接触を盛んにし、遣隋使、遣唐使を派遣する。当初の使節は原始・古代以来の朝鮮海峡を渡り、朝鮮半島西岸伝いを北上する航路を用いたが、大宝2年(702)の第7回以降は、博多湾から平戸、五島を経て、東シナ海を一気に横断して華中に至る南路⁸を利用するようになる。その後、遣師が繰り返される中で、潮流や風向、沈礁など危険の把握、進行の目印となるランドマークや安全な停泊地の情報、薪水の補給体制など、航海に必要な知識や体制も蓄積されたと思われる。しかし遣唐使船には、巨船であるが船体強度や航行性能が低いという弱点があり、遭難も多く発生した。

延暦23年(804)の第18回遣唐使では、のちに天台宗、真言宗の開祖となる最澄と空海が渡唐を果たしており、日本宗教史上重要なできごととされている。その後、航路の沿岸部にあたる志々伎山や安満岳など、古代から海人の信仰を集めていた霊山に、これらの宗派の寺院が建立されていくのは、単なる教勢の拡大だけに留まらず、航路の貿易活動と関連した形で捉えることができる。

寛平6年(894)遣唐使の派遣が菅原道真の建議によって廃止されるが、この頃には、日中間の交流は、国家による使節の往来から、新羅や唐の民間海商の活動に移行していた。それら

⁸ 使船の航路は、難波(大阪湾)から瀬戸内海を西下し、筑紫大津浦(博多湾)に入り、ここから出航した。初期は壱岐・対馬を経て朝鮮の西沿岸を北上し、渤海湾口から山東半島に至る北路がとられた。ところが、白村江の戦いののち、新羅との国交がとだえると、九州南端から種子島、屋久島、奄美大島、沖縄島、石垣島などを經由して、東シナ海を横断して揚子江口を目ざす南島路がおもにとられるようになった。『唐大和上東征伝』に記される鑑真の来日航路がこれにあたる。さらに奈良時代後半以降になると、大津浦をたち、肥前値嘉島(五島列島)付近から順風を利用して一気に東シナ海を横断して揚子江岸に向かう南路(大洋路)がとられるようになった。

の国の商船は、中国に來航していたイスラム商船の影響を受けて高い航海能力を有し、遣唐使が開いた航路を、より安全に航行する事ができた。この時期以後、約 800 年にわたって、この航路『南路（大洋路）』（図 16）は、日本と中国を結ぶ最も重要な航路となって「人、物、文化」を伝えている。

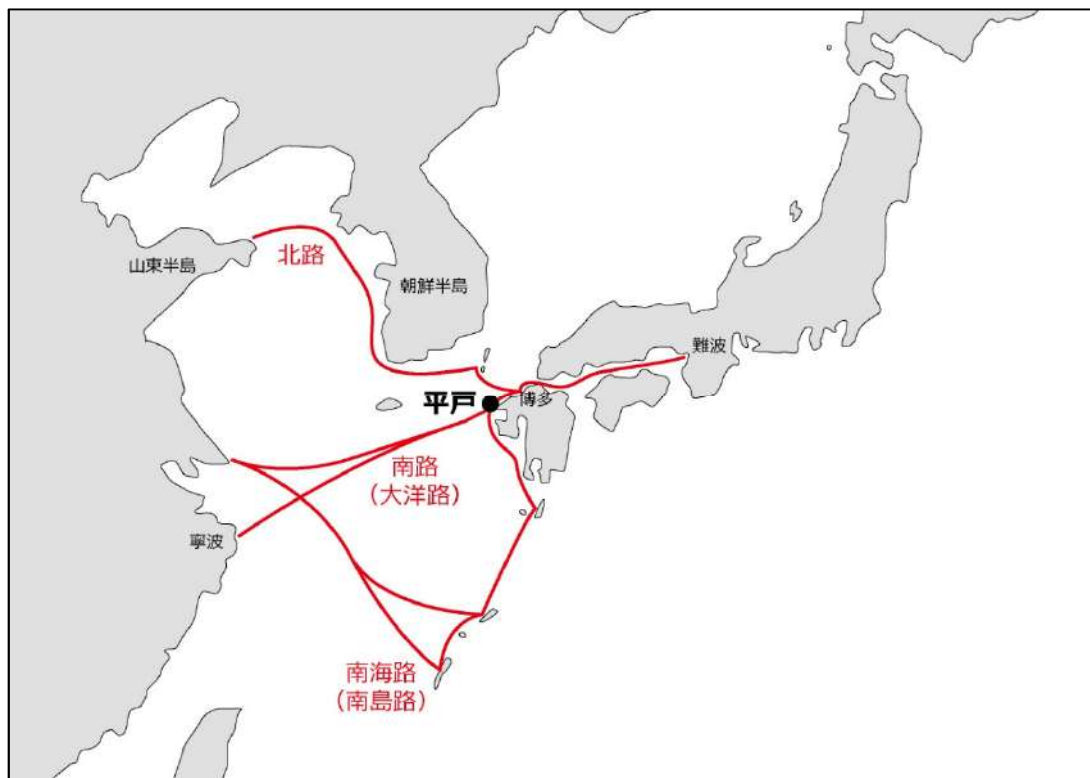


図 16 南路（大洋路）

南路は、博多を起点とし、平戸、五島列島を経由し、中国側の寧波を終着点とする航路である。この航路を、毎年中国の商船が往来し、日中の様々な文物を運び、留学僧なども同乗している。博多や平戸などには中国人が多勢居住し、貿易に絡んだ業務に従事している。

南路の港となった場所からは、石製の碇（碇石）（写真 14）が発見されており、港町平戸の中心には、宋元代の中国の航海神・招宝七郎を祀る廟（七郎宮）（図 17）が設けられた。



写真 14 宮ノ浦港で引き上げられた碇石

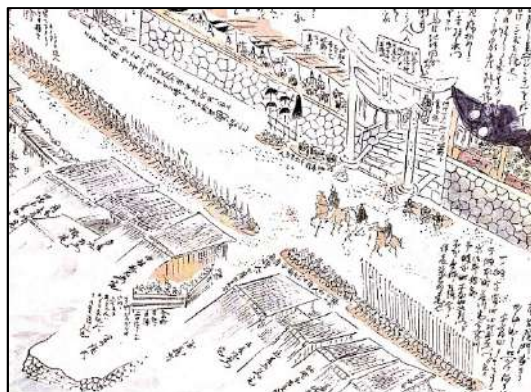


図 17 七郎宮で年中行事を行っている様子

年中行事絵巻：（財）松浦史料博物館蔵

宋代以降、中国では北方の騎馬民族と戦うために、様々な火薬兵器を用いるようになる。火薬の原料（硝石、木炭、硫黄）のうち、硫黄は火山から産出されるため中国では取れず、九州南端沖にある硫黄島（喜界島）で採掘されたものが、九州西岸を通り、南路の貿易船にもたらされる。時期を同じくして、博多周辺、平戸島周辺、薩摩半島南部では、寧波（明州）近傍で産出する梅園石で製作された、薩摩塔や宋風狛犬が建立され、現在も残っている。平戸では志々伎山、安満岳、田平の海寺跡などに残り、密教系山岳寺院の所在地に、中国人海商が奉納したと考えられている。

平安時代末期以降には、臨済宗の祖・栄西や曹洞宗の祖・道元など、禅宗を修めるために渡宋する僧が現れる。日宋の禅宗寺院のネットワークは、貿易にも影響力を発揮するようになり、建久 6 年（1195）に博多に建立された臨済宗の聖福寺を始め、平戸も含め南路沿岸に建立された禅宗寺院は、以後、遣明船の時代にかけて、貿易や外交に伴う役割を担っている。

南路の歴史は平和な交流の歴史だけではなく、高麗や南宋を征服したモンゴル人の帝国・元が、文永 11 年（1274）と弘安 4 年（1281）に、日本に侵攻している。特に弘安の役では、中国を発した江南軍の大船団は、南路を利用して来襲している。元の船団が台風で壊滅した伊万里湾も、南路沿いで大船団が停泊可能な海域として周知されていたと思われる。

鎌倉時代から南北朝時代にかけては、日中双方が戦乱に見舞われた事で、南路の貿易活動も影響を受けたと思われ、南路や北路の貿易活動に様々な形で依存していた沿岸諸氏の経済基盤を脅かし、彼らが独自の対外活動に走った結果が、この時期、朝鮮の沿岸を荒らし回った倭寇と呼ばれる活動の一つの要因ではないかと考えられる。

元の滅亡後に建国された明は、民間貿易を禁じ、国家間の使節の往来に伴う朝貢貿易の形を整えるが、室町幕府もこれに対応し、応永 8 年（1401）から天文 18 年（1549）にかけて 20 回程度、遣明船が派遣されている。

1540～50年代には、銀を求めて中国の私貿易商人が盛んに渡航してくる状況になる。南路の中間となる平戸港は、彼らの日本側の窓口となり、倭寇の頭目・王直が屋敷を構えた。

天文19年（1550）には、倭寇勢力と連携したポルトガル船が平戸に来航し、船員にミサを行うため、前年鹿児島に上陸したザビエルも平戸を訪れる。平戸における布教は、当初は平戸港周辺での個別の布教であったが、永禄元年（1558）と永禄7年（1565）には、生月島、度島、平戸島西岸の籠手田・一部領で一斉改宗が行われている。村々には教会や十字架が建てられ、信者は信仰の組によって様々な行事を行い、オラショという祈りを唱えた（写真15）。慶長5年（1600）頃には、聖画（図18）を祀って信心を行う組が生月島で設立されるが、当時のキリシタン信仰の形態は、禁教時代にも保持され、こんにちの「かくれキリシタン信仰⁹」まで継承（図19～22）されている。



写真15 聖地中江ノ島でのお水取り行事
（博物館島の館所蔵）



図18 納戸神と呼ばれるご神体
（博物館島の館所蔵）

慶長14年（1609）平戸港（写真16）にオランダ船が来航し、オランダ商館（写真17）が設けられる。オランダ人相手の貿易量は1630年代に入って飛躍的に増大する。慶長18年（1613）にはイギリス船が平戸港に来航し、商館も設けられている。また、平戸からは朱印船も出航している。寛永18年（1641）には幕府の命令でオランダ商館が長崎に移され、海禁政策もあいまって平戸の800年にわたる海外貿易港としての歴史は幕を閉じる事となる。

9世紀には確立し、17世紀初頭まで使用された、博多と寧波を結ぶ航路・南路は、長く日本の最も重要な対外航路として機能してきた。この南路は、中継港としての平戸港を通過しており、その際にもたらされた異文化の受容は、平戸港を中心として更にその周辺地域へと航路や街道によって様々な形で影響（アーチの技術、南蛮菓子など：写真18・19）を与え続け、在来の伝

⁹ 長崎県カクレキリシタン習俗調査事業報告書では、信仰を継承している組織がもはや隠れておらず、日本の伝統的なさまざまな民俗信仰と融合し変容している状態から「カクレキリシタン」と定義している。本書においては、国選択無形民俗文化財の名称である「かくれキリシタン」を使用した。

統文化や生活生業とともに各地域を特徴づける要素として集積し、現在にまでその痕跡を引き継いでいるのである。（図 24）



写真 16 国際交流の窓口であった平戸港



写真 17 平戸オランダ商館



写真 18 アーチの技術（幸橋：オランダ橋）



写真 19 南蛮菓子（カスドース）

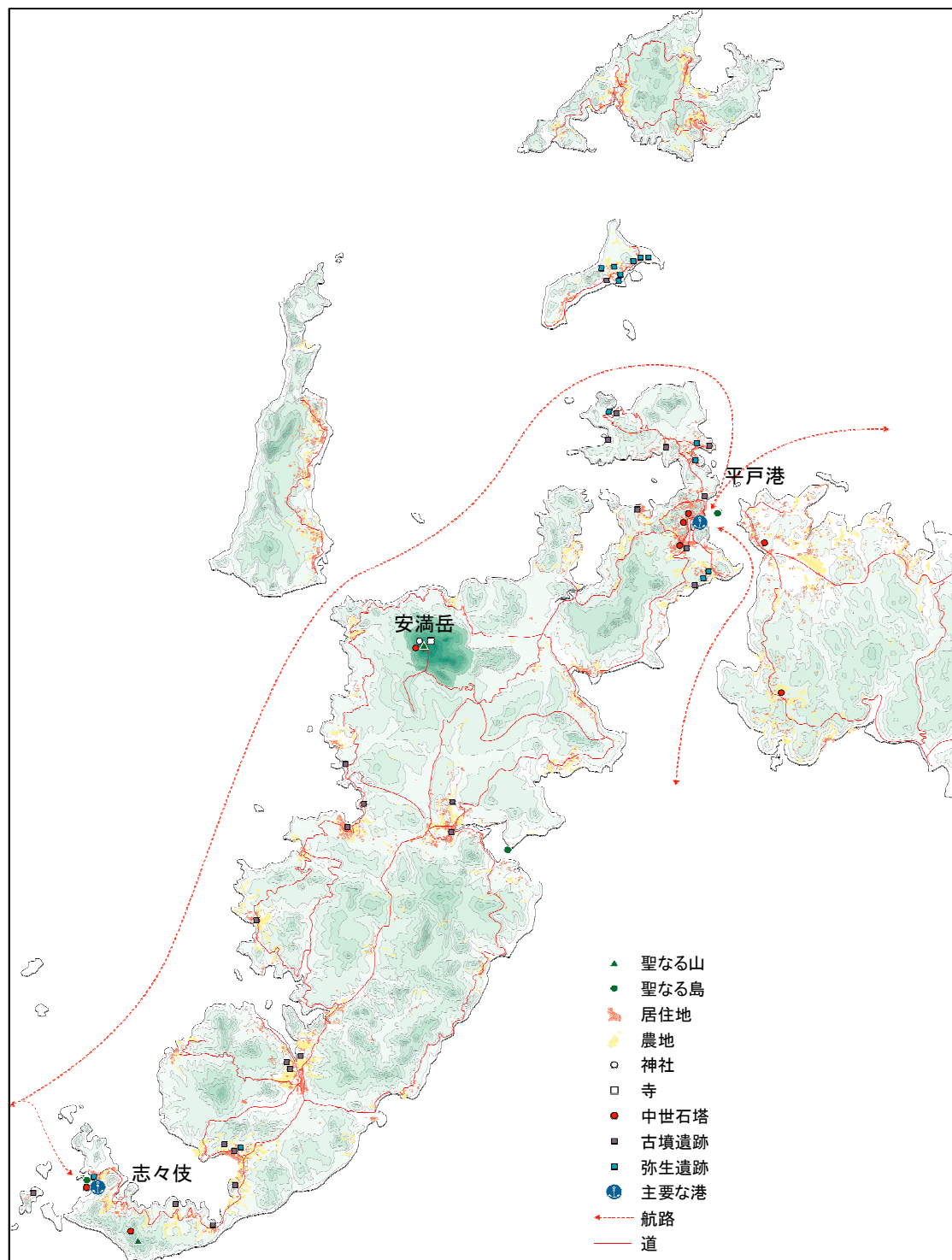


図 19 12～13 世紀頃の状況

平戸の海外貿易の歴史は少なくとも 9 世紀まではさかのぼることが史料で確認されている。安満岳は海上交通の目印となり信仰され、中世にも密教の信仰対象であったことが石造物などから確認できる。松浦一族は、それぞれの本拠地を定め、室町時代から安土桃山時代にかけて佐賀県西北部および長崎県北部一帯に群雄割拠した。小規模ながら同盟を組んで事にあたってきたものの、永享 6 年（1434）の白狐山城の戦いを契機に戦乱の様相が現れてくる。平戸松浦家第 23 代弘定（ひろさだ 覚翁 かくおう）は文明 15 年（1483）、志々伎を除く一帯を平戸に帰属させた。

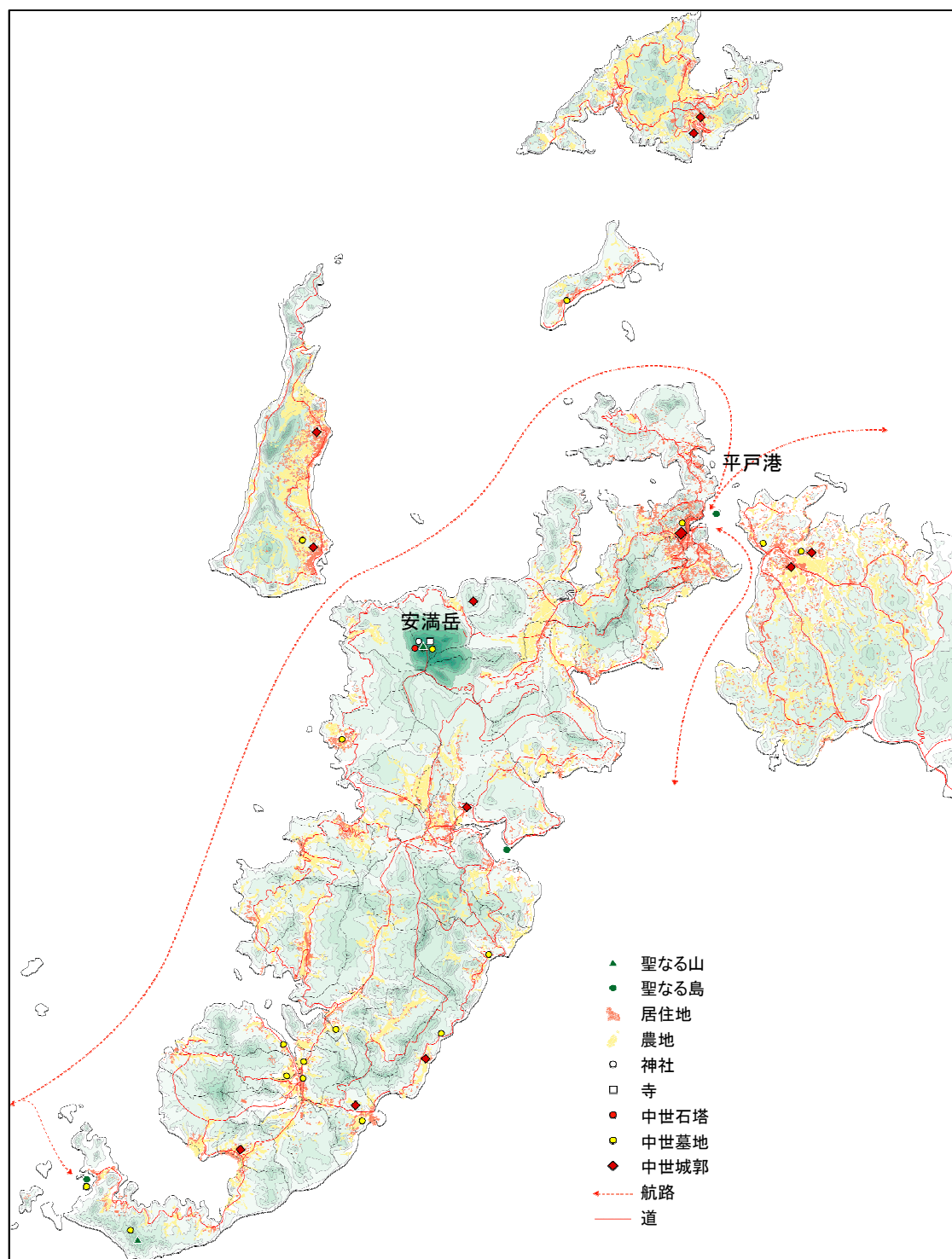


図 20 16 世紀初頭の状況

かねてより大陸の私商が多く訪れて賑わいを見せていた平戸港であったが、平戸松浦家第 25 代隆信（道可）は、^{たかのぶ どうか}中国人海商の首領であった王直^{おうちよく}を平戸港に招き入れ、中国交易を盛んに行い、勢力拡大を図った。以降、平戸は「西の都」と呼ばれるほどの繁栄をみせる。王直の手引きによって天文 19 年（1550）ポルトガル商船が平戸に入港すると、平戸は一気に西欧貿易港として注目されていくことになる。

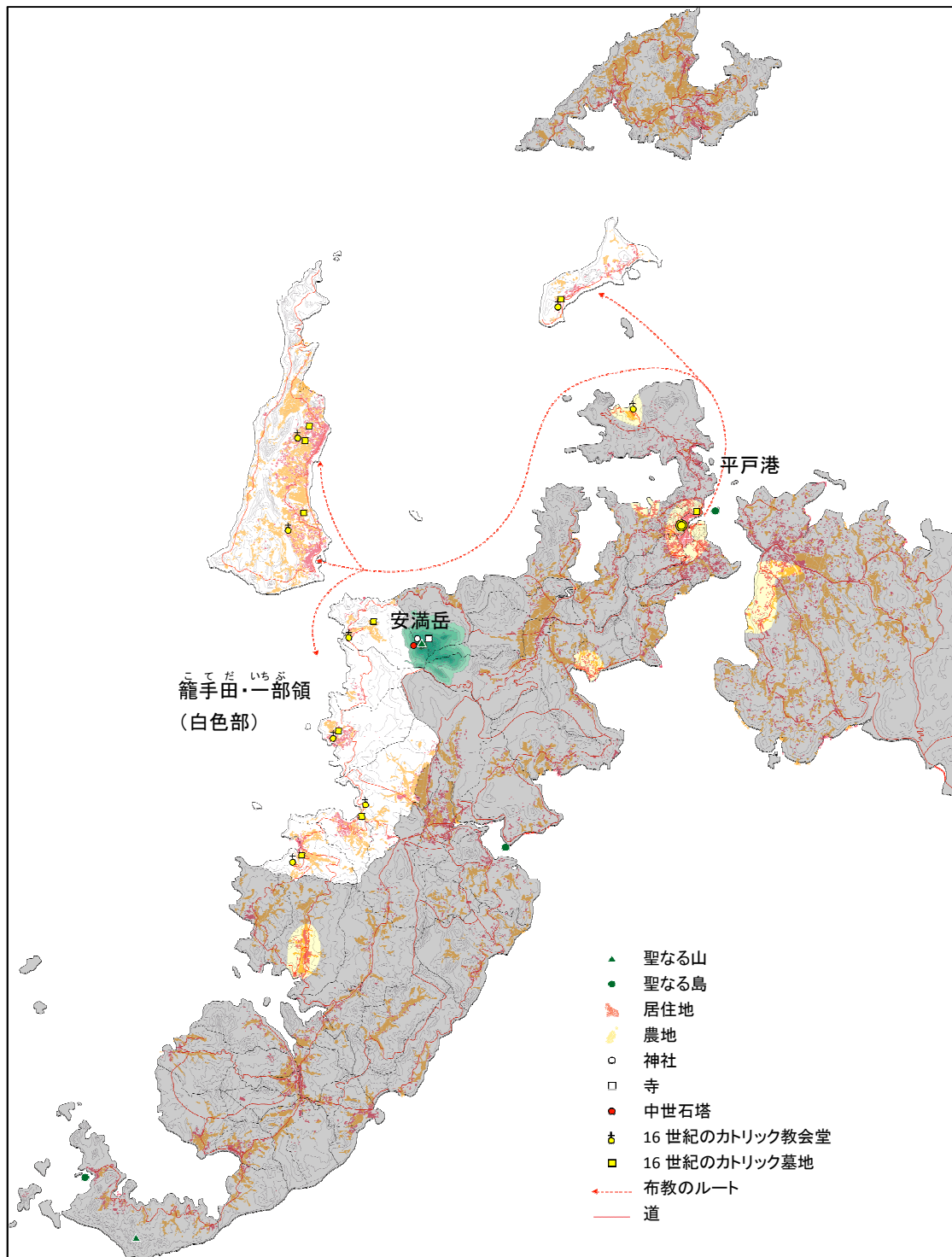


図 21 16 世紀中葉以降の状況

天文 19 年（1550）平戸に来航したポルトガル船員にミサを行うためにザビエルが平戸を訪れる。平戸における布教は、当初は平戸港周辺での個別の布教であったが、永禄元年（1558）と永禄 7 年（1565）には、生月島や平戸島西岸の籠手田・一部領（図 21 白色部）で一斉改宗が行われている。村々には教会や十字架が建てられ、信者は信仰組織によって様々な行事を行い、オラショというキリスト教の祈りを唱えた。

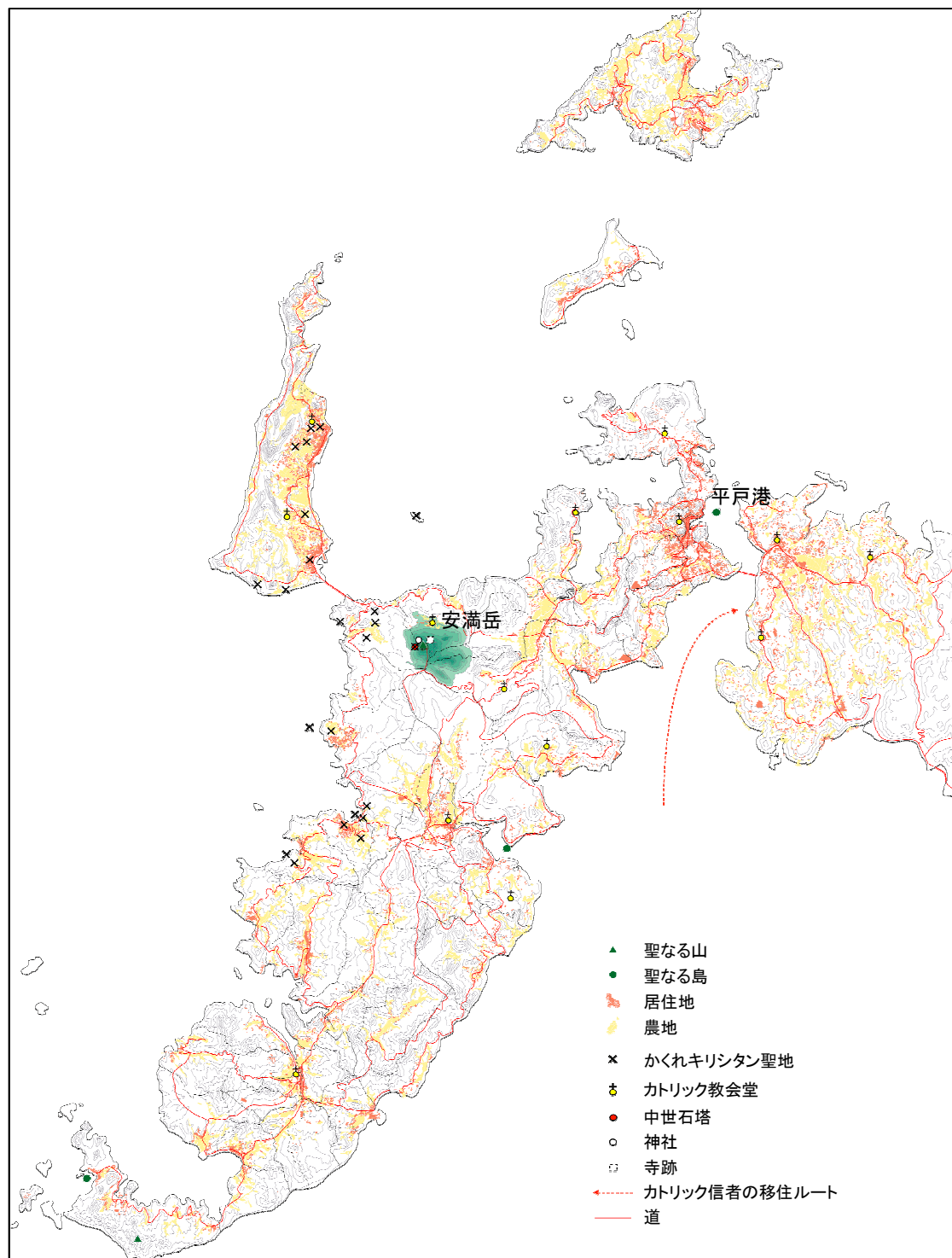


図 22 19 世紀から 20 世紀頃の状況

慶長 4 年（1599）に、それまでキリスト教の布教に寛容であった領主が没したことをきっかけに、平戸ではキリスト教への弾圧が強まっていく。慶長 5 年（1600）頃には、一斉改宗を行った各集落で信仰組織が作られており、その組織によって、当時のキリシタン信仰の形態は、禁教時代にも保持され、殉教にまつわる聖地やキリスト教の祭具などをご神体としながら潜伏時代を経て、こんにちの「かくれキリシタン信仰」まで継承されている。

2-4-2. 平戸港周辺における城下町の形成

(1) 平戸城下町のなりたち

一般的に港ができる場所の条件は、「船の出入りの容易さ」と「波風が避けられる地形であるか」の2点であるとされる。つまり、海が袋状に深く湾入している地形がよいとされ、現在の平戸港は埋め立てが進み、奥行きを感じられない港であるが、文化元年（1804）に築地町の埋め立てが完成するまでは、まさしく「袋状」の港であった。これに加え、瀬戸の両側には陸地が迫り風の影響を受けにくかったことや、一定の時間に一定の方向に潮が流れるということも、時間さえはかれば容易に出入りできるという利点になった。

このような条件のもと、国境をまたぐ港町が形成され、そこに平戸松浦氏が本拠を置くことで城下町として発展していくことになる。

平戸がいわゆる城下町という特性を持つのは、17世紀中期から19世紀後期までの約200年程度であるが、平戸港では、それ以前の9世紀頃から大陸との交易を行っており、その歴史と繁栄を刻んできた。一般的に城下町の構造は、城を中心としてその周囲に家臣の屋敷、さらにその周囲に武家屋敷があり、その外側に町民の街区が形成される。一方、平戸では港を中心とした平地部に町民の街区が形成され、それを囲む丘陵地に藩主の居館や家臣の屋敷、寺社が配されている。現在、亀岡に建つ平戸城の場所に港の後背地から城が移されたのは、慶長4年

（1599）のことであり、こうした構造は、平戸市街地が城下町として発達したのではなく、港町であり、交易都市として発展してきたことを示している。（図23）

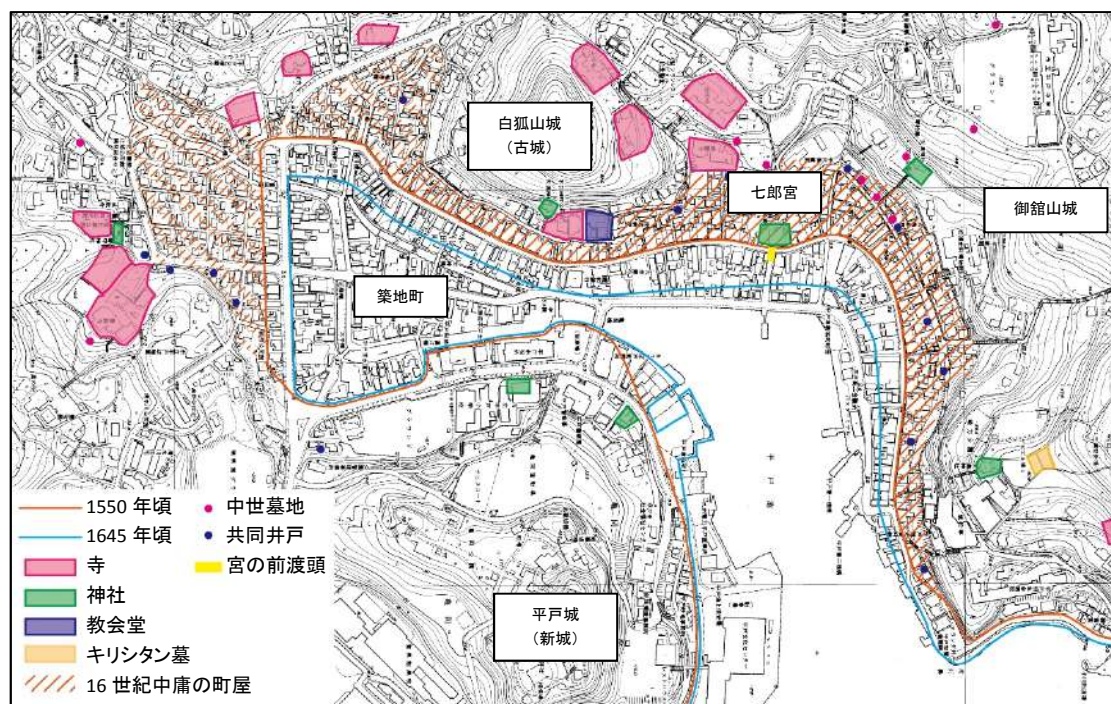


図23 平戸港周辺の変遷図

（２）平戸城と居城の変遷

平戸藩主松浦氏は、その始祖を平安時代嵯峨天皇の第 18 皇子源融^{とある}とし、その子孫で平戸松浦家第 11 代持^{たもつ}（照山）^{てるやま}が、嘉禄元年（1225）頃に現在の松浦史料博物館の裏山に「御館山城」（写真 20）を築いた。正平 7 年（1352）第 16 代勝^{すべる}（国司）^{こくし}が現在の勝尾岳に「白狐山城」を築くと、松浦氏は長く居城とし、室町時代・戦国時代を過ごした。文禄慶長の役（1592－1598）に従軍した第 26 代鎮真^{しげのぶ}（法印）^{ほういん}は、凱旋の翌年の慶長 4 年（1599）に、朝日岳（日の岳）と呼ばれていた現在の亀岡に近世城郭「日の岳城」を築いた。日の岳城は、それまでの城とは異なり、櫓や塀、石垣、門塀などを備えた大きな城であった。

日の岳城は、慶長 18 年（1613）の失火¹⁰によって焼失したため、元和 6 年（1620）頃に「御館」を建設、居館・藩庁とした。

その後、享保 3 年（1718）第 30 代棟^{たかし}（雄香）^{ゆうこう}の代に再び亀岡に「平戸城」（写真 21）を再築、明治 4 年（1871）廃城となる。



写真 20 御館山城が築かれた松浦史料博物館の裏山 写真 21 平戸城（現在の城は昭和に再建）

【参考文献】

- 1) 山田千香子、吉居秀樹（2011）『平戸・西海学 長崎県北の歴史と文化』
- 2) 平戸市（2011）『重要文化的景観「平戸島の文化的景観」周知啓発フォーラム 配布資料』
- 3) 平戸市（2016）『平戸市総合戦略 第 1 部平戸市人口ビジョン』
- 4) 平戸市教育委員会（2011）『平戸 海外に開かれた自由な港市 シンポジウム報告集』
- 5) 平戸市史編さん委員会（1998）『平戸市史 古写真編 想い出の平戸』
- 6) 平戸市史編さん委員会（1998）『平戸市史 民俗編』
- 7) NPO 法人平戸観光ウェルカムガイド（2009）『平戸検定公式テキストブック 平戸の文化と自然』

¹⁰ 慶長 5 年（1600）の関ヶ原の戦いに松浦氏が参戦しなかったことで、徳川氏から敵視されることを恐れていた時期であり、当時の風説では松明の火の粉が城に燃え移ったという話がセーリスの日記（日本渡航記）にあるが、広域な城が全焼しているため、失火というのは口実で自ら焼き払ったのではないかといわれている。

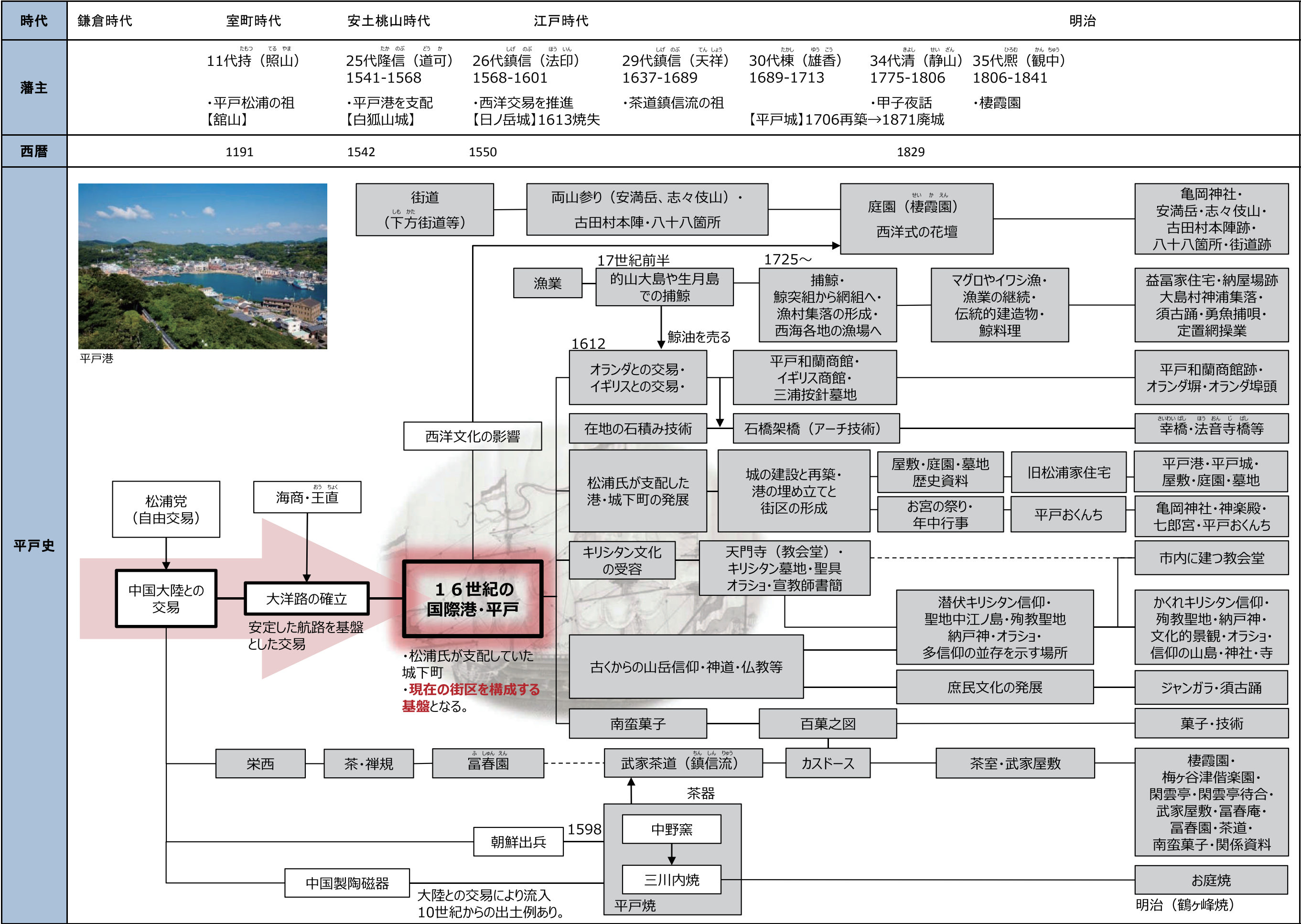


図 24 大陸との航路を軸に見た平戸の歴史

2-5. 自然的環境

2-5-1. 自然環境

平戸市は九州の西、長崎県の北西端に位置し、^{ひらどしま}平戸島、^{いきつきしま}生月島、^{あづちおおしま}的山大島、^{たくしま}度島、^{たかしま}高島の有人島及び九州本土北西部の沿岸部に位置する田平と周辺の多数の島々で構成されている。
(図 25)



図 25 地形図

平戸島は平戸大橋により田平と、生月島は生月大橋により平戸島とそれぞれ結ばれている。的山大島、度島、高島は離島であり、交通手段は船舶のみである。平戸島は、東西の両側に、

起伏量 200m内外の中起伏火山地が北東～南西方向に存在し、その間に谷が発達しており、火山地を大きく二分している。また、九州本土に位置する田平地区は、全体的になだらかな丘陵地で、南から北に向かって緩やかに傾斜した溶岩台地が広範囲を占めている。

生月島は、南北に走る溶岩台地によって東西に分かれている。溶岩台地の東西両側には、多発した地すべりの土石流による山麓地が形成されている。中央部には陥没による低地があり、現在も地すべりの多発地帯をなしている。

気候は、周囲のほとんどが海に囲まれており、対馬暖流と季節風の影響を受け、海洋性の温暖な気候で、通年の平均気温は 16～17℃、年間平均降水量は 2,000mm 前後である（表 11）。

表 11 平戸市の平均気温及び降水量

	1 月	2 月	3 月	4 月	5 月	6 月
平均気温 (℃)	6.7	7.3	9.9	14.0	17.7	21.0
降水量 (mm)	81.5	92.5	156.0	184.8	205.4	310.6
	7 月	8 月	9 月	10 月	11 月	12 月
平均気温 (℃)	24.9	26.3	23.4	18.9	13.9	9.2
降水量 (mm)	362.3	215.6	233.4	94.6	104.4	68.3

※年間平均気温 (16.1℃)、年間降水量 (2,109.3mm)

市域は、安山岩や凝灰岩などの火成岩が主体になっている。これらの火成岩は、今から約 1500 万年前の火山活動や地殻変動によるもので、各所にその影響を受けた地形や景観を見ることができる。平戸島の^{しら}白岳、^{やすまん}小富士、^{ゆうそうず}安満岳、^{じげん}有僧都岳、^{つぶて}慈眼岳、^{さし}白岩岳、^{びょうぶ}礫岩、^{しじき}佐志岳、^{あづち}屏風岳、^{たく}浜岳、^{あづち}志々伎山などはその頃の火山地形をした山々で、平戸の景観を形作っているだけでなく、地域の象徴としても親しまれている。ある程度の厚さの玄武岩は柱状節理となり、生月島西岸や田平北部の観光資源にもなっている。平戸島北部や生月島、^{あづち}的山大島、^{たく}度島、田平には、日本最大級と言われる北松玄武岩台地の西端が分布している。

2-5-2. 地形・地質

平戸島は、東西の最大幅約 9km で、北東から南西方向に約 40km 伸びた面積 163 km²の平戸市最大の島である。平戸島の最高峰は安満岳（536m）で、西側の生月島からは原生林の上部に崖が広がる残丘地形を見ることができる。

中部の^{ひもさし}紐差から^{ねしこ}根獅子にかけての地域は、^{へんきゅう}変朽安山岩（プロピライト）という変質岩があり、以前は陶器の原料として採掘されていたようである。

安満岳西側の山野から春日にかけてと、大志々伎の潮見崎、宮の浦のオイトク島あたりは火山灰が火砕流の影響を受けてできた溶結凝灰岩がある。安満岳北西部、呼崎（白石）の灰白

色の軽石凝灰岩や春日付近の層灰岩は、いずれも火山岩質の岩石や火山灰が起源で、数百万年前の火山活動の産物と考えられる。(図 26・27)

2-5-3. 植生

平戸市は大陸に近く、10 数万年一約 2 万年前に生じた最終氷河期に、植物の移動分布の影響を受けやすかったと考えられ、さらに対馬海流は暖流系植物の北上分布にも大きく影響していると思われる。このような自然環境を有する平戸市域の植生は、大陸系および暖流系の植物が他地域より多く、やや高所には北方系の種が入り込んでいて複雑であり、平戸島南部を中心に固有種や準固有種を含め、独特の植物相を形成している。平戸島南部には、「平戸^{つぶて}礫岩の岩石地植物群落（国指定天然記念物）」(写真 23)があるように、平戸固有種を含めた地域を特徴づける貴重植物が集まっている。

安満岳から鯛の鼻にかけてアカガシヤマシキミ群落があり、安満岳の頂上付近に原生林(写真 24)として残存している。集落付近などではマテバシイハクサンボク群衆、シイカシ萌芽林、スギーヒノキ植林が目立つ。海岸林は、ハマビワオニヤブソテツ群集で、生月島ではクロマツ群落もみられる。海岸植物群落としては、ダルマガクホソバワダン群集がツワブキやコオニユリを伴って生月島などにある。

草原は、ススキメガルカヤ群集などとなっており、川内峠(写真 25)、佐志岳、上段の野、春日、高越、生月島などに出現する。(図 28)



写真 22 生月島南部周辺航空写真



写真 23 礫岩



写真 24 安満岳自然林



写真 25 川内峠

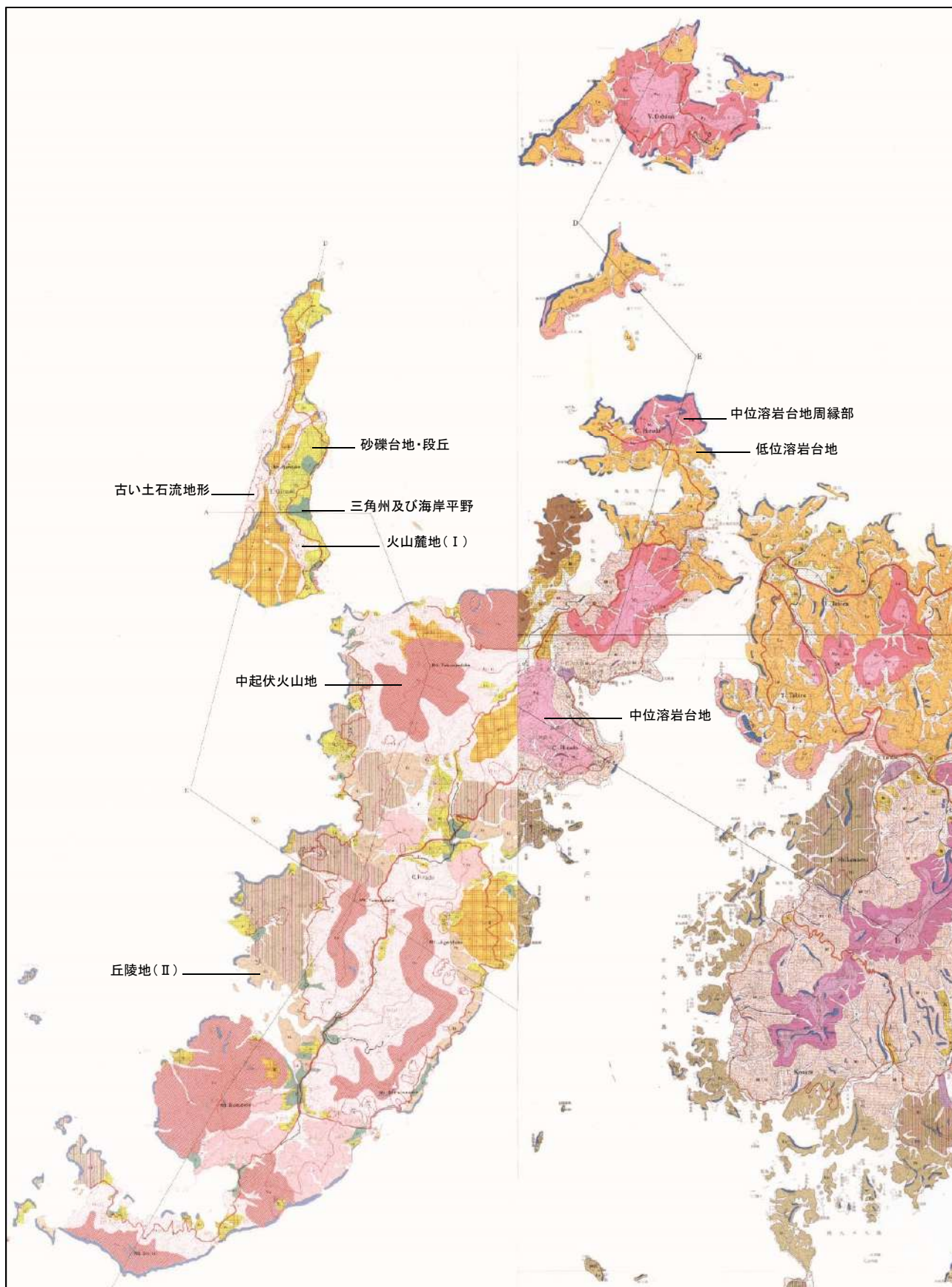


図 26 地形分類図 (国土庁, 長崎県 1974-1978 を接合)

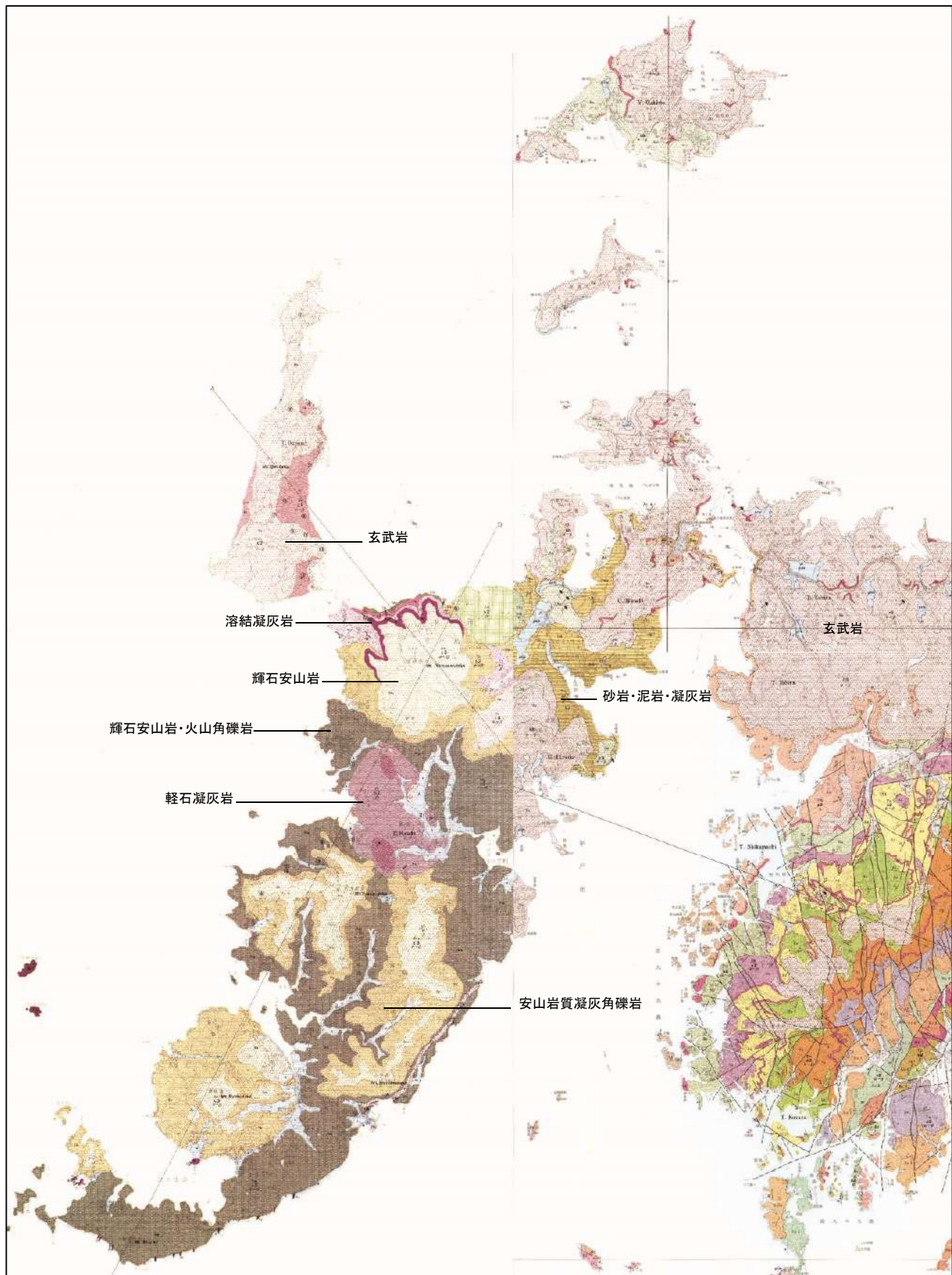


図 27 表層地質図（国土庁、長崎県 1974-1978 を接合）

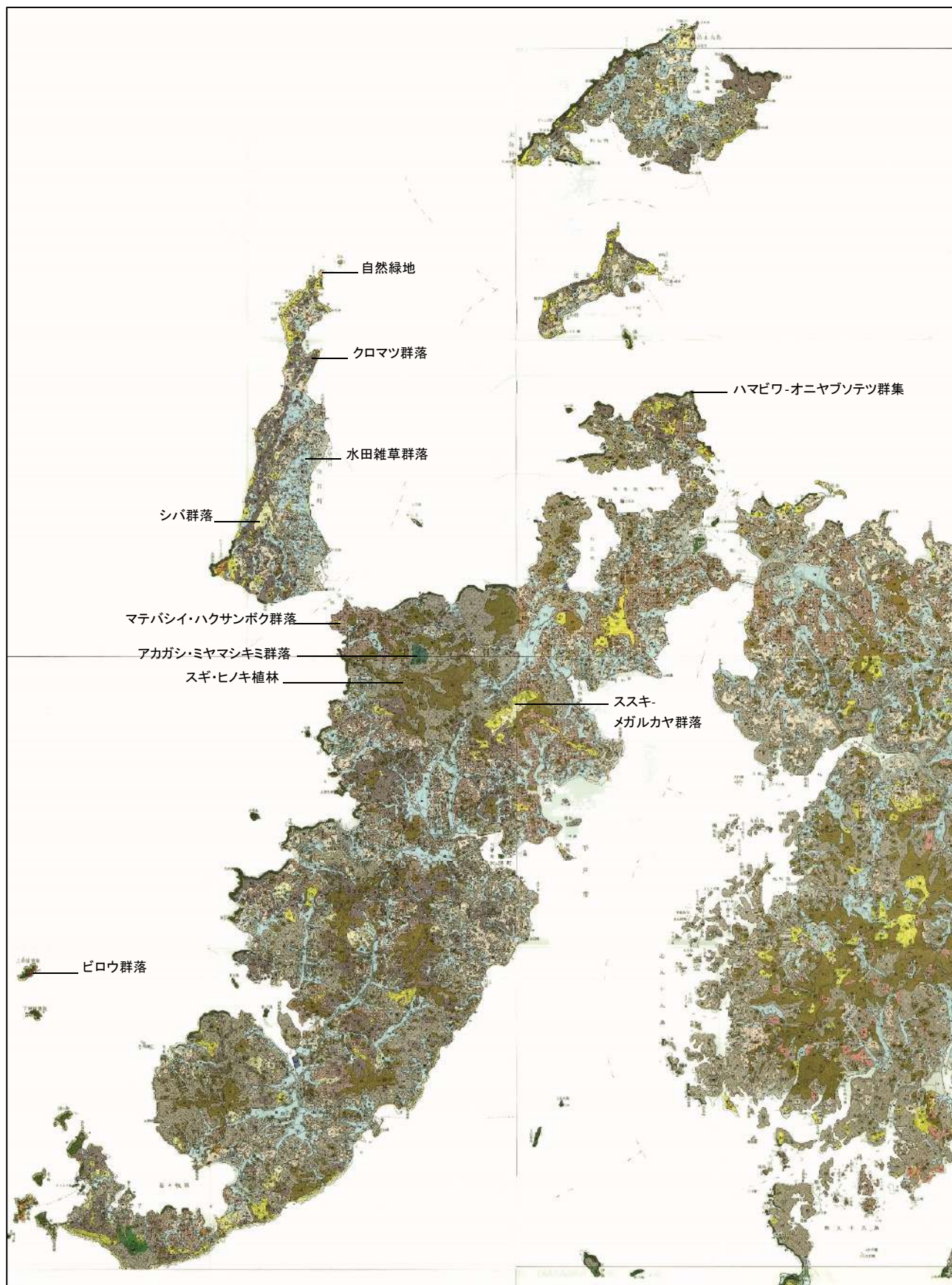


図 28 現存植生図（環境庁 1986）

2-6. 文化財の周辺環境

2-6-1. 文化財周辺の規制

平戸市の土地利用規制として主なものは以下（表 12）のとおりである。現状を変更する場合、形態・意匠、景観などについて文化財部局や景観部局の担当者が協議を行うことになる。

特に文化財保護法における重要文化的景観や、景観法における重点区域、自然公園法における特別地域などの指定は、より広域に現状変更を調整する制度になっており、平戸市においても事業者と事前協議を行う上で有効に機能している。

表 12 文化財の周辺環境を保全する土地利用規制一覧

区 分	内 容
文化財保護	・重要文化的景観、埋蔵文化財
景観	・景観計画重点区域
自然公園（国立公園）	・特別保護地区、第 1 種特別地域、第 2 種特別地域、第 3 種特別地域、普通地域
国土防災	・保安林、地滑り防止区域、急傾斜地崩落危険区域
農地保全	・農業振興地域、農振農用地区域

各土地利用規制範囲図（図 29）

2-6-2. 行政機関・関係団体など

平戸市で、文化財の保全や活用を担う機関や団体の概要は以下のとおりである。地域資源の保存・活用の推進体制については、第 9 章に記載する。

（1）行政機関

平戸市では、文化交流課が文化財や文化振興に関する業務を 7 名で担当（表 13）している。文化財は、先人より引き継いできた地域の宝であり、次世代に引き継いでいくべきものであるが、近年の少子高齢化などにより、これまで地域コミュニティにより継承してきた文化財の保護が難しくなっている現状にある。地域にとって益にならない地域資源や、誇りだと思えない行事などはいずれ引き継がれなくなってしまう可能性を踏まえ、早急にその活用を図り、持続可能な保全の仕組みを作らねばならず、それを実現していくための体制の維持が必要になってくる。

表 13 市文化財担当部局の人員体制（平成 31 年（2019）3 月現在）

名 称	人数	業務内容
平戸市文化観光商工部 文化交流課	7 人	・文化財の調査研究に関すること ・文化財の指定に関すること ・文化財の保護に関すること ・文化財の情報発信と普及啓発に関すること ・博物館、資料館の事業調整に関すること ・世界遺産に関すること ・日本遺産に関すること ・歴史文化基本構想に関すること ・市民芸術文化活動の推進に関すること ・文化振興（イベント）に関すること ほか事務事業など

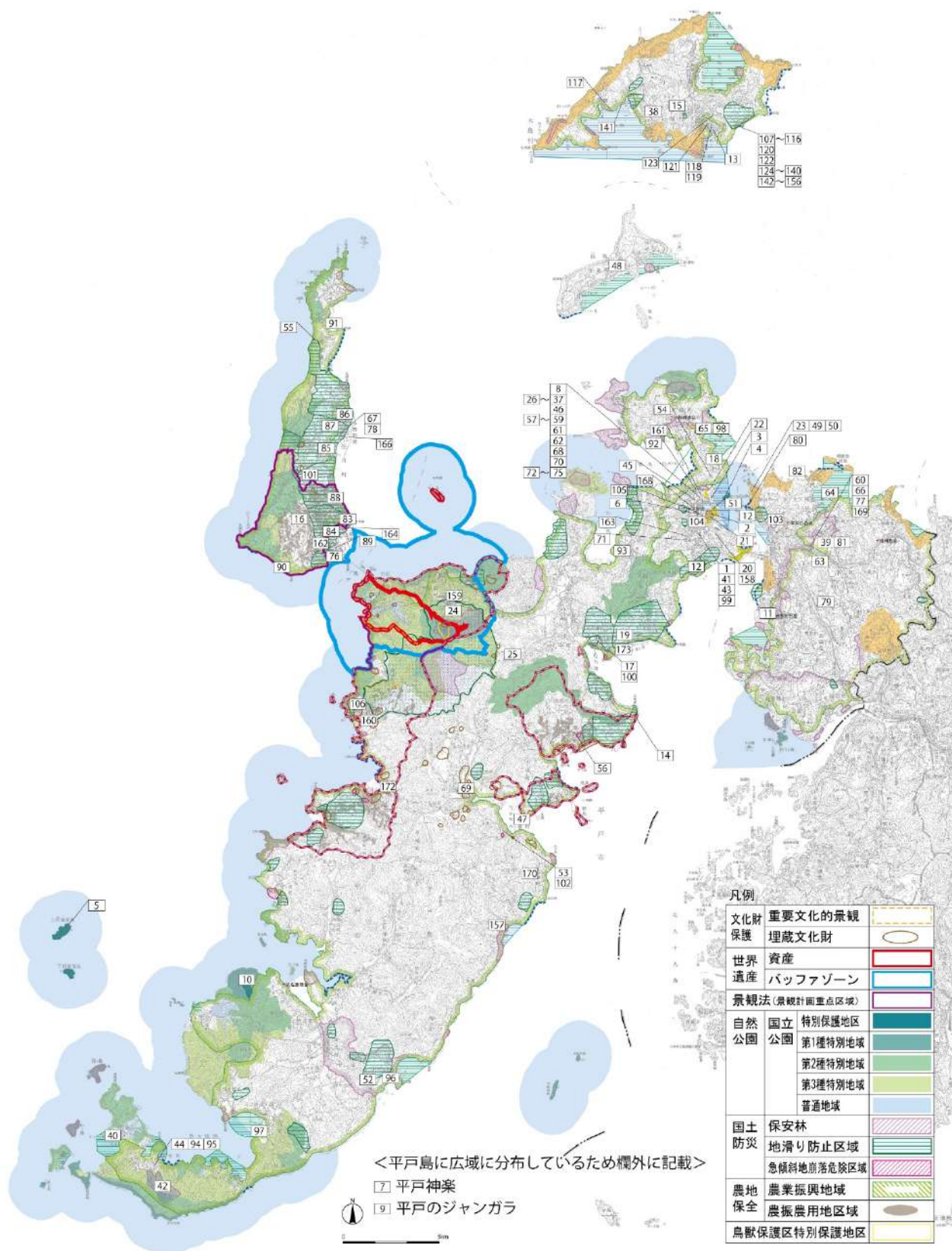


図 29 文化財周辺の土地利用規制図

(2) 関係団体

伝統芸能の保存団体として、下記団体（表 14）が活動を行っている。団体構成員の高齢化に伴う後継者不足などが課題として挙げられるが、高度経済成長期以降の社会構造の変化などにより、生業の形態や地域コミュニティのあり方も変化し、それに伴い伝統芸能の簡素化だけでなく、失われていったものも多いと考えられる。

伝統芸能の継承は、地域の貴重な伝統文化を次世代に引き継ぐということだけでなく、それに関わる子ども達への教育や世代間交流を通じた地域コミュニティの活性化を図るという今日的な側面もあると考えられ、大変重要な取り組みになっている。

表 14 伝統芸能保存団体一覧

名 称	地区	芸能名
平戸神楽振興会	平戸地区	平戸神楽
平戸自安和楽保存会	平戸地区	平戸のジャンガ
中野自安和楽保存会（山中）	平戸地区	平戸のジャンガ
中野自安和楽保存会（川内在）	平戸地区	平戸のジャンガ
宝亀自安和楽保存会	平戸地区	平戸のジャンガ
紐差自安和楽保存会	平戸地区	平戸のジャンガ
根獅子自安和楽保存会	平戸地区	平戸のジャンガ
中津良自安和楽保存会	平戸地区	平戸のジャンガ
津古自安和楽保存会	平戸地区	平戸のジャンガ
大志々伎自安和楽保存会	平戸地区	平戸のジャンガ
野子自安和楽保存会	平戸地区	平戸のジャンガ
度島町民俗保存会（中部地区）	平戸地区	度島の盆ごうれい
度島町民俗芸能保存会（浦地区）	平戸地区	度島の盆ごうれい
度島町民俗芸能保存会（三免地区）	平戸地区	度島の盆ごうれい
築地町ジャ踊り保存会	平戸地区	築地町のジャ踊り
獅子須古保存会	平戸地区	獅子の須古踊り
田助ハイヤ節保存会	平戸地区	田助ハイヤ節
生月勇魚捕唄保存会	生月地区	生月勇魚捕唄
館浦須古踊保存会	生月地区	館浦須古踊
荻田浮立保存会	田平地区	荻田浮立
的山須古踊保存会	大島地区	大島の須古踊
西神浦須古踊保存会	大島地区	大島の須古踊
東神浦須古踊保存会	大島地区	大島の須古踊
前平川畑流儀保存会	大島地区	大島の流儀 前平川畑・東流儀
大根坂流儀保存会	大島地区	大島の流儀 大根坂流儀
的山流儀保存会	大島地区	大島の流儀 的山流儀
大根坂ジャンガ保存会	大島地区	大島のジャンガ

2-6-3. 文化財関連の条例、規則、活動団体への支援制度（補助金）など

平戸市の文化財関係の条例は以下（表 15）のとおりである。平戸市文化財保護条例のほか、重伝建と重文景については、各々補助要綱が設けられている。

その他、文化振興や民俗文化財の保存団体などに対する補助制度があるほか、平成 25 年（2013）に制定された平戸市認定文化財規則は地域資源を広く保存・保全するために有効に機能している。現状では、伝統芸能保存団体への運営補助や文化財の整備（修理）への補助のほか、消防設備の点検などに補助を行っている。

表 15 文化財関係（文化振興含む）の例規など

No.	例規名など	概 要
1	平戸市文化財保護条例（平成 17 年 10 月 1 日条例第 205 号）	平戸市の区域内に存する文化財のうち、市にとって重要なものについて、その保存及び活用のため必要な措置を講じ、もって郷土文化の向上に資することを目的とする。
2	平戸市文化財保護条例施行規則（平成 17 年 10 月 1 日教育委員会規則第 36 号）	平戸市文化財保護条例の施行に関し、必要な事項を定める。
3	平戸市文化財審議会規則（平成 17 年 10 月 1 日教育委員会規則第 37 号）	平戸市文化財保護条例の規定に基づき、平戸市文化財審議会の組織及び運営に関し、必要な事項を定める。
4	平戸市指定民俗文化財保存会運営補助金交付要綱（平成 21 年 3 月 31 日教育委員会告示第 22 号）	指定民俗文化財保存会の活動を推進し、伝統芸能の伝承を図ることを目的とし、保存会に対し、平戸市指定民俗文化財保存会運営補助金を交付する。
5	平戸市認定文化財規則（平成 25 年 9 月 30 日教育委員会規則第 8 号）	平戸市文化財保護条例の規定による平戸市認定文化財の認定について定める。
6	平戸市重要文化的景観を形成する構成要素修理修景事業補助金交付要綱（平成 28 年 3 月 24 日教育委員会告示第 1 号）	国選定重要文化的景観「平戸島の文化的景観」選定地区内において行う修理修景事業に対し、予算の範囲内において平戸市重要文化的景観を形成する構成要素修理修景事業補助金を交付する。
7	平戸市伝統的建造物群保存地区保存条例（平成 19 年 6 月 27 日条例第 44 号）	文化財保護法に基づき、本市が定める伝統的建造物群保存地区に関し、地区の決定、現状変更の規制、その他その保存のため必要な措置を定める。
8	平戸市伝統的建造物群保存地区保存条例施行規則（平成 19 年 6 月 27 日教育委員会規則第 4 号）	平戸市伝統的建造物群保存地区保存条例の施行に関し、必要な事項を定める。
9	平戸市伝統的建造物群保存地区保存事業補助要綱（平成 20 年 2 月 25 日教育委員会告示第 4 号）	平戸市伝統的建造物群保存地区保存条例の規定に基づく補助金の交付に関し、必要な事項を定める。
10	平戸市文化団体活動補助金交付要綱（平成 21 年 3 月 31 日教育委員会告示第 21 号）	文化協会及び民俗芸能保持団体の活動を推進し、地域住民の文化的意識の向上を図ることを目的とし、文化団体に対し、平戸市文化振興事業補助金を交付する。
11	平戸市未来創造文化振興基金条例（平成 23 年 3 月 25 日条例第 17 号）	文化芸術活動の充実と豊かな人間性の形成を図り、文化を生かした個性豊かな地域づくりを行うため、平戸市未来創造文化振興基金を設置する。

12	平戸市未来創造文化振興事業補助金交付要綱 平成 23 年 3 月 22 日教育委員会告示第 3 号)	平戸市未来創造文化振興事業実施規則の規定に基づき、平戸市未来創造文化振興事業補助金を交付する。
13	平戸市未来創造文化振興事業補助金交付要綱 (平成 23 年 3 月 22 日教育委員会告示第 3 号)	平戸市未来創造文化振興事業実施規則に基づき、平戸市未来創造文化振興事業補助金を交付する。
14	平戸市文化振興事業実施規則 (平成 17 年 10 月 1 日教育委員会規則第 44 号)	平戸市の歴史資料等の調査と文化振興を図るための事業実施に関し、必要な事項を定める。
15	平戸市文化振興事業補助金交付要綱 (平成 17 年 10 月 1 日教育委員会告示第 12 号)	平戸市の文化振興を図るため、平戸市文化振興事業補助金を交付する。

【参考文献】

- 1) 長崎県 (1974) 『土地分類基本調査 県北総合開発地域 平戸』
- 2) 長崎県 (1974) 『土地分類基本調査 県北総合開発地域 佐世保』
- 3) 長崎県 (2008) 『長崎県世界遺産構成資産基礎調査 地域・地区調査報告書 平戸地域』
- 4) 国土交通省ホームページ『土地分類調査・水調査 > 5 万分の 1 都道府県土地分類基本調査 > 5 万分の 1 都道府県土地分類基本調査』,
<http://nrb-www.mlit.go.jp/kokjo/inspect/landclassification/land/5-1/4201.html>



川内峠